

Luigi Foscolo Benedetto
Il Milione: la tradizione manoscritta (3)

ルイージ・フォスコロ・ベネデット
『イル・ミリオネ：写本の伝統』（三）^{1）*}

Ch.6 F以前の段階
Ch.7 反響と様々な断片

高田英樹 訳

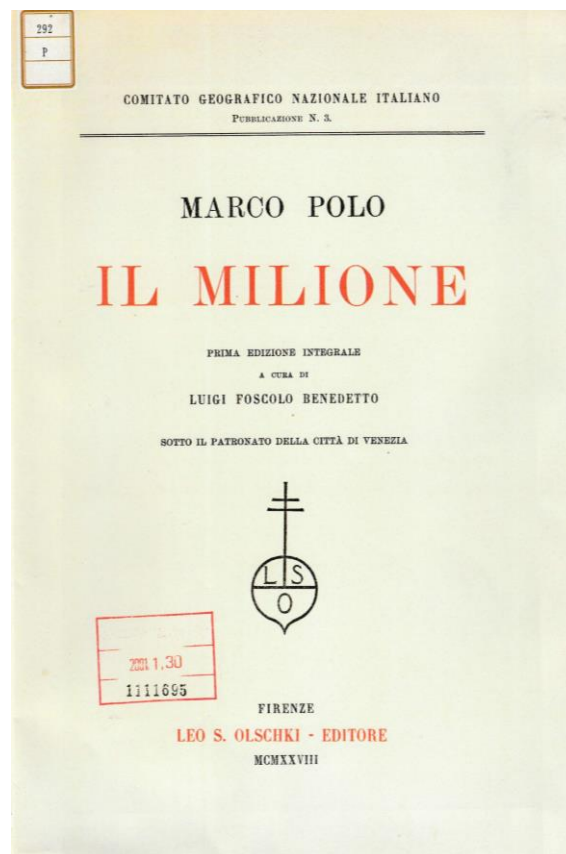


図 1 表紙

第六章 F 以前の段階

1 ラムージョの「驚くべき昔」の写本（ZとZ¹）

1559年ヴェネツィアのジウンティ Giunti 印刷から『ヴェネツィアの貴人マルコ・ポーロ殿ならびにアルメニア人ハイトンによって書かれたタルタル人の事どもの歴史とその皇帝たちの事績の歴史を含む航海記・旅行記 第2巻』*Secondo volume delle Navigazioni et Viaggi nel quale si contengono l'Historia delle cose de Tartari, et diuersi fatti de loro Imperatori, descritta da M. Marco Polo Gentilhuomo Venetiano, et da Haiton Armeno* が出た。この貴重な集成の第1巻と第3巻はそれぞれ1550年と1556年に出ていた。第2巻は、収録物をさらに増やそうと編者が印刷を延ばしていたのだが、その死(1557年)で未刊に終わった。死後出版ではあるが、これまた前2巻と同じくジァムバッティスタ・ラムージョ Giambattista Ramusio の労作である¹⁾。そのことは、ポーロの部の序文をなす1553年7月7日付フラカストロ Fracastoro への献辞が証している。そこに、この新たな版のオリジナリティーと重要性がはっきりと主張されてある。ラムージョは、ポーロの書をいくつかのとても古い手稿本を用いて、それを信頼できないものにしていた「無数の不正確と誤り」から救い、自筆稿の完全さに近づけた、と誇っている。同様な内心の意図が、「ヴェネツィアの貴人マルコ・ポーロ、タルタル人と東方インディアの事どもについて、その国民の暮らしと習俗、その国々ならびにその他多くの注目すべき驚くべき事どもについての記。3巻に記され、‘いまだかつてこれほど全体的かつ内容豊かに刊行されたことはない’」とのタイトルからも窺われる。事実、進歩は著しかった。編者は自分が採った方法と用いた写本について正確なデータは何一つ提供していないが、どのように進めたかはそのテキストを分析してみるだけで充分である。かの哀れなヴェネツィア印刷本をイタリアにおいても、グリネウスが広めたはっきりとより優れたテキストでもってして替える、というのが彼の最初の企図であつたに違いない。すでに指摘したごとく彼の版は、まずP〔ピーノのラテン語版〕の一翻訳として始まったし、実質的にもそうで

ある。その仕事を進めて行く中で彼は、何かマルコの書のペン書きの稿本について聞き伝えるたびにそれを検討し、その中からより興味深い新たな箇所を選び分け、すでに選んでいたテキストと混ぜ合わせるという作業を行った。が、異質の能力と全く異なる型の教養を必要とするこうした精密で微妙な作業の中に、彼はある種の危険な軽率さと恣意性を持ち込んでしまった。それでもそれは、我々の判定がどうであれ、それまでに知られていた写本の伝統全体の比較検討に基づいた、マルコ・ポーロの批判的校訂版の最初の試みであった。また彼の用いた典拠のいくつかの優秀さが、実際この新たなテキストに他のどれよりも際だって優れた地位と、後に発見された手稿すら打ち消すことのできない高い記録的価値を与えたことが付け加えられなければならない^{2*)}。

フラカストロへの手紙の中でラムージョは、「150年も前に書かれた極めて古い」いくつかのテキストを用いたと述べている。またとりわけそのうちの一つに負うところが大きかったと打ち明けている：「このようにしてまず最初マルコ・ポーロ殿によってラテン語で世に出され、それから多くのコピーが作られ、我らが俗語にも訳されて、数か月ならずしてイタリア中がそれで一杯になったほどなのだが、それほどにこの物語は誰からも待ち望まれていたのだった。

‘その書の、最初ラテン語で書かれた驚くべき昔の、おそらくはマルコ殿自身の手によりオリジナルから書き写された一つのコピーに私は何度も目を通し、今世に送り出そうとしているこれと照らし合わせた。その写本は、それを手元に置いてとても大切にしていた我が親友当市ギジ家のさる貴人から借り受けたものである’」。そしてラムージョは、自分の版の冒頭に二つの異なる序文を再録した。一つは例のピピーノ版のもの、もう一つはギジの貴重な遺品の中に彼が見つけたものである。こうしてその仕事の最初から、彼が依って立つ二つの主要な基盤、Pと彼の言う自筆稿かコピー、がはっきりと示されていた。

ラムージョのテキストの重要性は、2世紀以上にわたってほとんど知られないままだった。その作品は全く効果も反響もなかったわけではないけれども²⁾、またすでに見たごとく、それを相変わらずピピーノと混ぜ合わすという形でかなりの者が敬意を表してきたけれども、実際には後者〔P〕が首位を保っていた。この根強い無理解に対して、明確な意識と誠実な熱意をもって異議を唱えた最初は、

すでに我々が取り挙げた『寄稿』 *Beitrag* におけるレッシング *Lessing* であった。さらに、あのおり明らさまに褒めそやすその言葉のおかげで、部分的に守られたただだったパーチャス *Purchas* の約束を本当に実行することを決意した者が現れた。かくて 1818 年、マースデン *Marsden* の賢明で愛情に満ちた編纂になる、ラムージョ版『マルコ・ポーロ』の最初の真の英訳、かの大旅行家を記念して建てられた最も価値ある記念碑の一つ、が素晴らしい装いで出た³⁾。この手本は実り豊かだった。1827 年にはバルデッリ・ボーニ *Baldelli-Boni* 伯がフィレンツェで、ポーロに関する大著の第 2 巻として『ラムージョテキストに基づくヴェネツィア人マルコ・ポーロ殿のミリオネ、解説と註』を出版したのだが、彼は「地理的部分においても科学的部分においても」そのテキストが最良であることを確信していた。「何故ならそのテキストが最も内容が豊かで、題材が巧みに分けられかつ適切に並べられており、地名が大体においてより正しいから」であった。「そこに書かれてあることの多くが、ラムージョより 2 世紀後の旅行家たちによってようやく確認されたほどのものであることからして」、かの編者 [ラムージョ] が自分のものを書き加えたのであらうとの仮説は捨て、かの旅行家が自分の書を倦むことなく手直しし膨らませたのであり、ラムージョの新記事はそのようにして追加された何らかのコピーから来たものであらう、と推定した⁴⁾。このマースデンとバルデッリ・ボーニを手本として、1845 年にはアウグスト・ビュルク *August Burck* による R [ラムージョ版] の良好なドイツ語訳も出た⁵⁾。ポーロ研究がこうして徐々に深まりをみせるにつれ、ラムージョの謎のテキストを避けて通ることはもはやできないとの確信が根付いた。ズルラ *Zurla* (I, p.39) とチコーニア *Cicogna* (II, p.317) がはっきりとその擁護者となった。グレゴワール改訂版に対するその嫉妬深い情熱をすでに見たあのポーチェですらその注に、「‘今日余りにも等閑視されているかも知れない’ 重要性」(p.395) をラムージョ版に認め、自分が依った手稿にはない R の箇所をいくつとなく引用し、全幅の確かな信頼の言葉を添え、それらはマルコの死後その書類の中に発見されたかそれとも最初の稿本の何らかのコピーに彼自身によって書き加えられたものであらう、との考えを明らかにした⁶⁾。ユールは――括弧に入れて区別したりそれぞれの章の付録として最後に加えたりして――かの旅行家の手にのみ帰すことのできる R 特有の箇所、その個人

的な体験の反映であることが余りにも明白な箇所を、自分の訳版に採り入れた。ユールは、Rが一集綴テキストで確実にすでに崩れていた伝承写本に基づいたものであり、したがってとりわけFと較べると底本としては採用できないことを認めざるを得なかったけれども、ラムージョのいくつかの新記事がポーロ的な痕跡を止めていることは疑い得ないものとして認めないわけにはいかなかったし、またラムージョが用いた典拠の中に少なくとも一つはその喪失がなんとしても悔やまれるものがあったと結論せざるをえなかった。彼は、マルコが晩年おそらく何らかの写本の余白に補足的な覚え書きや新たな記憶を手ずから書き加え、それが後に集められてラテン語に訳されたのであろう、と推定する。ラムージョかそれとも彼の代わりに他の者たちがそれをもう一度訳してピピーノのテキストと混ぜ合わせたのであり、そうした二重の作業の過程でそれらに何らかの多少とも重大な変更を来たすことは避けられなかったであろう、と⁷⁾。

こうして高まっていった好意的見方は、――それはラムージョ問題の意識の高まりに等しいものであったが――反撃によっても止まらなかった。バルデッリ・ボーニに反対するマーレイ Murray の説、すなわち「きっとこの追加事柄の大部分‘おそらく全部’が、他人の手によって挿入されたものである」⁸⁾との説も、何らかの支持者を見い出した。言い方は慎重で穏やかだがもちろん、ラムージョは偽作者だ、というのがマーレイの確信であった。つまり、それら新記事はごく最近の旅行者から採ったもので、それをさも大昔のポーロの手稿から取ってきた箇所のごとく厚かましく挿入したのだ、というわけである。彼は、ジウンティによってラムージョの死後出版された1583年の版にはギジ所有の‘驚くべき古い昔’の写本への言及がことごとくなくなっていることを⁹⁾、もちろん悪意がないとは言えないほのめかしをもって指摘する(p.33)。これが偏見であることは、彼が確信をもってする議論が薄弱であることから明らかである。彼は、Rには実際にいくつか加筆のあること、ポーロの他のテキストと較べてしばしば劣っていること、否定し難い誤りがいくつかあることなどから、作品全体に価値のないこと、個々の箇所がどれもこれも信頼に値しないことを結論する。オリエントの現実や歴史との完全な一致が実証されたR固有の情報については、オリエントとの交渉があれほど頻繁だったことからして、ラムージョが手に入れることのできた他の何らかの証言に事欠くことはなかった

であろうとみなす。根拠つまり正確な一致の具体的な確認でもって証明することのできないときに人がする、怠慢極まりない見解である。マーレイはまた、Rのみに含まれている箇所には、同書の残りの部分とは正反対の感情が表現されていると言う——例えば、国民から神のごとく崇拝されているとポーロの言うクビライが、チェンチュの謀反の章では彼を憎悪する国民の抑圧者となっている。しかしながら、その反乱がアクマック [アフマド] に対してであってクビライにではなく、嫌われるどころか彼に対してはいかに過ちを償い正義を擁護する者の役割が帰せられているか気づくには、その話を読むだけで十分である。

実りある問題設定はしかし、かの謎のギジ稿本の同定のさるなんとも惨めな試みによって遅らされた。「それはまことにもって嘆くべき喪失である——とズルラは書く——ラムージョによって眼にされ検討されたかくも貴重な稿本が今日もはや存在しない、あるいは知られないというのは。しかしながら、まさにそのものではないにしても少なくともそれに似た別のものを、かの旅行記の古いテキストについて私が行なった浅からざる調査において発見したように私には思える」。そして彼は、その兄弟写本とはかの LT [トスカナ語版のラテン語訳] だと言うのである！この説明不可能な仮説は、もちろんそれを既定の事実のように受け入れる者を見出した。バルトリ Bartoli は、ラムージョの信用を失墜させんがため、LT ——あの哀れな集成者 [ズルラ] がその信憑性と重要性を誇張した典拠——が単に TA [トスカナ語版] の一反映であることを示すにとどめている¹⁰⁾。

ラムージョに対するレッシングの信頼は、R固有の記事のあるものについて彼が、その時まで誰によっても検討されていなかったヴォルフエンビュッテル Wolfenbuttel の一写本に対応箇所を発見したことに端を発している。ユールの高い評価もやはり、この優れたマルコ・ポーロ研究者がさるヴェネツィア手稿に論議の的となっていた新記事のうち七つを見いだすことができた事実によっていた。ポーロ写本の伝統全体の組織的な探索あるいはひょっとして幸運な‘発見’が、ラムージョによって用いられた全ての典拠、とりわけきっと彼がそこからあのもっとも注目すべき新記事を手に入れた‘驚くべき昔の’典拠の前に我々を立たせてくれるであろうとの確信に至ることは明らかだった。事実ユールは書いている：「ポーロの

作品のテキストに関して残る最重要課題は、ラムージョが彼の版だけに見い出される箇所をそこから引き出した補助写本の発見である。それがまだ存在している可能性はあるが、その痕跡は全体的な形ではまだどれにも発見されていない」。また、問題の根本的な重大性の対するさらに鋭敏な感覚をもってフォン・リヒトーフエン von Richtofen は言う：「マルコ・ポーロ旅行記の原典研究においては、ラムージョによって用いられた写本の発見が大きな成果を上げるであろうが、その重要性については、マルコ・ポーロ自身の手になる追加のオリジナルの発見だけがそれに優先するであろう」¹¹⁾。

私の研究によって、ラムージョテキストをその様々な要素に分解することが私には可能となった。それ[R]は、五つの異なるテキストから結果するものである。まず第一にPで、内容においても文体においても作品の構成においても本来の主要な基盤である。第二が、私がV, L, VBと呼ぶところの三つの版である。これらについてはすぐ後で取り上げ、それぞれのRへの影響を指摘する。最後が、私がZと呼ぶ写本によって今日証言されているもう一つの版で、本質的にRの新しさと重要性を作り上げているもの、他のどの典拠にも見られず研究者たちの空想をかくも悩ませてきたかの諸章を彼に提供したものである。P, V, VB, Lから持ち込まれたものを取り除くと、残ったものはかの問題の箇所の最も重要なものと正確に対応する。それら残ったものが今では失われた複数の稿本からくるのではなく、ただ一つの稿本——もちろん序文の手紙の中で触れられているギジ稿本——に遡ることは、その大部分を含み、それ以外にも今まで知られなかったが確実にポーロのものであり、しかも価値において劣らぬ他の記事をも含む一写本が生き残っていることから証明される。

もし私がその発見の誇りに目が眩んでいるのでなければ、Zは実際ついにポーロの問題全般と、とりわけラムージョの問題に決定的な光を投げかける。

アンブロジーナ図書館写本 ms. Y 160 P.S. (紙, 32x22, 211 葉) を私はZと呼ぶ。それは、今は失われたセラダ Zelada 手稿の私の知る限り唯一のコピーで、前にも述べたが、そのポーロ関係文書の収集を完全なものにするため修道院長トアルド Toaldo によって 1795 年幸運にも作成されたものである^{3*)}。転写の忠実さと原本の古さは、トアルド自身の冒頭の書き込みが保証している：「この稿本

はゼラダ枢機卿睨下の紙手稿より書き写された。親切にも睨下は私にそれを書き写すことを許し、パドヴァに送り、その取り扱いをステファノ・ボルジア枢機卿睨下ならびに教皇特使の下ヴェネツィア人ペトロ・ペーサロ殿に委ね給うた。同手稿は 14 世紀終りか 15 世紀始めに書かれたと記されている。転写は、このパドヴァの教会カテドラルのアウグスティーノ・カルツァヴァーラ殿とベネディクト・トニーニ殿によって、最高の熱意とまたその文字のおそろべき分かりにくさのため大変な苦心をもって共同作業として行われ、私の面前で自筆でもって一つにされた。転記は本日 1795 年 7 月 8 日に完了した」。この存在を知ったバルデッリ・ボーニが、セラダ枢機卿によってトレドの司教座聖堂古文書庫に遺贈されたと述べている「紙、8 つ折、15 世紀」写本を、このコピーのオリジナルと同定すべきである。12 タイトルは同じで、*de diversis hominum generibus et diversitatibus regionum mundanarum*「諸世界の様々な人種と様々な地域について」である。彼に引用されている僅かな箇所は、この Z と一致する。コピーの正確さのおかげで、その原本がフェッラーラの司教座聖堂参事会員ジュゼッペ・アンテノーレ・スカラブリーノにも属していたことが分かる¹³⁾。

書き出し：*Incipit liber domini Marci Pauli Veneti—Domini Imperatores Reges Duces Marchiones Comites Milites et Burgenses et omnes gentes qui vultis cognoscere diversa hominum genera et diversarum regionum mundanas (sic) diversitates accipite hunc librum.*「ヴェネツィア人マルコ・ポーロ殿の書ここに始まる——皇帝陛下、王、公、侯、伯、騎士に市民の殿方、それに諸世界の様々な人種と様々な地域のことをお知りになりたい方は誰あれ、本書を手にお取り下され」。結び (f.209r)：*Et cum inceperamus de mari maiori nos penituit ponere in scriptis quare multi sciunt et ideo discedemus ab ipso etc. Finis. Explicit liber domini Marci Pauli.*「我々は大海〔黒海〕について取り掛かったが、多くの人を知っていることを書くのはつまらなかったもので、止めることにする、云々。終り。マルコ・ポーロ殿の書ここに終わる」^{4*)}

すでに検討した諸版にはない箇所を別にし、F やそれに近い家族から窺えるテキストと対校すると、Z が F よりはつきりと良好な一フランク・イタリア語版の文字どおりのラテン語訳であり、そのラテ

ン語は元の言語に従順に則っていることが見事に確認される。残念ながら、今述べている稿本ではその訳は全体にわたっては行われていない。長い序章は数行に縮められ、ポーロ兄弟がブカーラでグラン・カンの使者と出会い、彼が二人を極東まで連れていくことにした次第が語られているだけである。第 36 章 [カマンディ・カラウナス] は大きく短縮されている。サマルカンドについての第 52 章は大部分、つまりサン・ジョヴァンニ教会の奇跡の話が省略されている。第 64(4)-71, 76-105, 109-111(8), 121(25)-125, 140 章は飛ばされている^{5*)}。第 121, 138, 145, 167 章は著しく削られている。しかし第 148 章から始まって同書の最後まで、すなわちこの写本の 3 分の 2 以上では、F のテキストが忠実かつ全体にわたって同じ順序で訳されている（唯一の例外は第 220 と 221 章で、作品の最後に置かれている）。一方前半の部分でも、欠落はあるが訳の文字どおりさは見劣りせず、多くの徴候からして、今に伝わるこのコピーは全訳本の縮約版であるか、あるいは少なくともその翻訳が我々がすでに知っている原本に順序においても内容においても同一の完全なテキストに基づいて行われたことは明らかである。序章 [Ch. 2-19] は犠牲にされているが、そのことを翻訳者か写字生が謝っている：「以下ほかに多くのことが述べられているが、他の必要なことに移れるよう、省略する」。皇帝の祝日や制度に関する一群の章はすっかり姿を消しているが、カタイオで飲まれる葡萄酒についての行は生き残り、f.34r の次のような文が残っている：「前述の都市、すなわちカンバルの方に下っていくと」。これは、完全版がなければ説明できないことである。ドル [金] 王のエピソードを省略した者は、第 111 章の少なくとも最初の数行を残しておかなければならなかったことに気付いていないのだが、それがなかったため f.35r の「その川を渡ると」という一句は謎になってしまっている。f.36r に、「‘この建物から’ マンガライが立ち去ったとき」とあるが、この稿本ではマンガライとその建物のことは何も語られていない。f.47r に、「‘同じように’ 鐘のついた……もう一つの銀の塔があった」とあるが、このテキストは最初の塔を飾る鐘楼については何も述べず、その箇所の代わりに *eccetera* <云々> とあるだけである。F ではっきりと記されている箇所に対応するところが、Z では *etc.* となっている箇所は多い。この頻繁な放棄と相対的な無視に対して、ある時点から始まる細心で持続的な編集の忠実さは対照的である。ほとんど二重のメン

タリティーで、翻訳家なら絶対に受け入れ難いものであるが、単なる写字生ならずと自然である。選別にとどめるつもりで仕事に取り掛かったのが、徐々に本に引き込まれ、ある点からもはや一語たりとも犠牲にできなくなったのである^{6*)}。

一フランク・イタリア語版から直接由来するものであることは、大きな文体的一致がその十分な証拠である。移し替えは体系的で、ラテン語が許す限界かそれ以上にまで至っている。**Runcini** (f.159r), **tacche** (f.161r), **berci** (f.94r 他) といった単語のほか、次のような対応に注目されたい^{7*)}：

CLVI 34-5:tot le succar que il fait ovrer en se cort --- totum zucharum qui in sua curia operatur.「彼の宮廷で供される全ての砂糖」 CLIX 8:eles sunt dou leigne que est apelle abbee et de capin --- constructe sunt de ligno abietis et zapini.「アッベエと呼ばれる木〔樅〕と松で造られている」 CLXXIX 16-7:il voloit laisser la corone, ne ne comandaroit nulle rien, mes il seulemant en fust mestre --- volebat refutare coronam et nihil precipere sed solus ipse esset dominus et magister.「彼〔父王〕は王冠を捨て何事も命じることの止め、彼〔仏陀〕だけが主にして師となることを望んだ」 CXCI 21-2:elle est de color toute roge et blanche a roelles -- sunt coloris rubei et albi ad rotunditates.「輪っかのような形に赤と白の色がついている」 CCVI 21-2:por ce que nos avon droit e nostre ennemis ont le tor --- quoniam ius habemus et inimici nostri obliquum.「我らに理があり、我らの敵に非があるのだから」 CCVII 17-8:mout entarente de domajer les enemis --- voluntarii multum in suos inimicos dapnum inferre.「敵に大損害を被らさんと決意して」 CCX 3:la amoneste mout docement de bien faire --- dulciter in bene faciendo admonuit.「うまくやるよう優しく忠告した」

例えば、Z の以下の行を F の CXCIV 19-57 と対照されたい：

Accidit enim quod iste rex qui dominatur toti provincie Abas, qui christianus est, dixit quod volebat ire in peregrinagium ad sepulcrum Iesu Christi in Ierusalem. Cui nobiles et barones sui dixerunt quod nimis periculosum esset si illuc accederet; sed laudaverunt quod mitteret unum episcopum vel alium prelatum. Et rex in hoc concordavit. Misit ergo pro quodam episcopo, qui

erat homo sancte vite, et ei dixit quod volebat ipsum loco sui pergere Ierusalem causa visitandi sepulcrum Iesu Christi. Qui dixit se velle tanquam domini sui adimplere precepta. Cui rex precepit quod se preparare deberet et, quam citius posset, iret.

「アバスの全地方を統べるキリスト教徒のこの王が、エルサレムのイエス・クリストの墓に詣でたいと言い出した。貴族や諸侯は彼に、そうならば極めて危険であろうと言った。そのかわり誰か司教か別の高僧を派遣するよう勧めた。で、王はこれに同意した。そこで彼は、敬虔な暮らしの人であったさる司教を呼び寄せ、自分の代わりにイエス・クリストの墓に詣でるべくエルサレムに巡礼してもらいたいと言った。彼は、あたかも自分の主のもののようにその命令を果たしたいと述べた。王は彼に、用意してできるだけ早く行くよう命じた」[以下略]

文字どおりさはこれ以上綿密、入念、純粹たりえないであろう。しかも、Zではほぼ常にそうであり、その翻訳の本質的特徴である。マルコの考えは、ほとんど常に十全の正確さでもって表されている¹⁴⁾。

これらの価値に、この翻訳が依拠した底本が確実にFよりも正しく保守的であったことが付け加えられなければならない。わずかながらそこに見られる共通の欠点とて、もっともそれが本当に欠点と言えるとするはだが、この判定を弱めることはない。例えば CLIV 20-3 の明らかに不完全な段落、CLVII 2 の謎の Choncha<コンカ>, CLXVI 8-9 の受け入れ難い s'apelle Malaiur la cite e l'isle<その町と島はマライユールと呼ばれる>, CLXXV 65 の欠落、CLXXVII 25 の奇妙な otel, 訳者が不満ながらに lisent<読む>と訳している CLXXVIII 53 の不明の li rent, これまた訳者がそれに劣らず不満げに et tous les roiaimes<そして全ての王国>と訂正している CLXXXIX 7 の est tous les roiaimes, CCII 29 の省略。一般的に言って、Fのある誤りがZとは関係なく何か他の写本で正しく訂正されていると、その同じ訂正がZにも見られると確信してよい(cfr. XXII 6, LXXII 35-6, CVIII 3, CXVIII 35, CXX 19, CXX 34, CXXVII 10, CXXVIII 11, CXXIX 5, CXIX 6, CXXX 12, CXXXVI 8, CXLIV 11, CXLVII 2, CXLVII 5, CXLVIII 17, CLII 9, CLIII 17, CLIII 23, CLIV 14, CLIV 20, CLX 9, CLXXXI 21, CLXXXV 30-1, CLXXXVI 17, CXC 5, CXCI 19, CC 22, CCIV 17-8)。Zの援けは、[Fの] 極

めて疑わしいか特別崩れているいくつかの箇所にとって天佑さながらに決定的である (cfr.例えば I 3, XXXI 6, XXXI 7, XLI 3, XLV 15, XLVI 11, XLVII 3, LXXIV 5, LXXIV 15, CVIII 4, CXV 4, CXV 10, CLIII 38, CLIII 117, CLIX 12, CLXVI 7, CLXXI 4, CLXXIX 90, CLXXXIII 16, CLXXXIV 31, CXC 18-9, CXCII 20, CXCIV 23, CXCIV 68, CCXI 1, CCXXII 5, CCXXIII 16, CCXXIV 18, CCXXXIII 30-1)。あまりにも F の語法に慣れてしまっていると、Z のラテン語に突然より大きな純粋性のこだまのようなものが聞こえる。つまり、Z の忠実な書き写しは時として F にとって健全な修復であるかのごとき印象を受けるのである。¹⁵⁾ 今に伝わるフランク・イタリア語稿本が Z の原本の前では全体としてより大きく崩れた形の一段階を代表していることは、人名や地名が [Z で] よりよく保たれていることから証明される。CXCII のタイトルを Z だけが **Magdaxo** <モガディーショ> としていることは、F も含めて他の全ての稿本が多少とも崩れた **Madeigascar** <マダガスカル> という異形をもっているのと比較すると、確実に注目に値する^{8*)}。アンブロジーノ写本に保たれているこの読みは、同章の内容とそれが提起する諸問題にとってもよく対応しているので、やはり **Mogdasio** という形になっている F の冒頭の目次――すでに見たごとくそれはより古い一段階の反映である――がそれを裏付けるのでなければ、近代の博識な訂正ではないかと考えることができるであろう。Z (cfr.LXXII 9) には **Singiu** <シンジュー> ではなく **Silingiu** <シリンジュー> とあるが、この名で示された町、今の **Si-ning-fu** <西寧府> が、チベット人からは **Ziling**、モンゴル人からは **Seling Khoto** と呼ばれていることを見るならば¹⁶⁾、それが元の正しい形であることは疑いえない。何人かの近代の編者も含めて他の写字生たちによってこのように奇妙に短縮された **-zu** で表されている語尾の **-giu** [州] が、Z でおそらく全く偶然に体系的な合理性でもって解説された、つまり **-zu** にされたのではあるまい。また、Z では当然のごとく **braaman** <ブラフマン> [バラモン] とあり、F や他の写本の奇妙きてれつな **abraiaman** ではない。聖トマスは使徒 (アラビア語 **havariyyun**) の一人であるとサラセン人がアラビア語で言うのをおそらく聞いて、マルコがその言葉を聖者の同意語として報告している箇所では、F (CLXXVII 7) のように **avarian** ではなく、**avarium** となっている。**au Catai** <カタイヘ> ではなく **Alochayray** (c.8r) とか **Alchatai** (c.29v) のよ

うな形は、Zの原本がある点ではFよりもイタリア語化していたことを示すのかも知れない。FとZの対校が可能な章に限って言えば、Zの方がより古いとの印象は時として内容そのものから与えられる。c.13rの「前述の城についてのこれら全てのことは‘ニコラウス’・パウロ殿に報告した」(F. XXXII 20-1「その二つの城市についてのことは全て‘マルク’・ポル殿に話し説明した」)は、もちろんZの誤りではない。オリジナル版ではニコロとマッテオの名はもっと頻繁に現れていたに違いなく、話をもっぱらマルコの名のまわりに統一した責は、一部には写字生に帰せしめられるべきであろう¹⁷⁾。カイドゥ王の娘についての章では、王女とその求婚者の競争の舞台は既知の版では宮殿の大広間であり、二人の競争者は「薄絹地をまとって」となっている。一方Zでは陣営の天幕であり、「革服」である。登場人物の戦士的な無骨さとかくも調和した地方色のこの筆致が後世の書き換えだとは私には思えないし、我々の宮廷物語に慣れ親しんだ西方の写字生がその荒々しさを自発的に柔らげた、という方が有り得るどころではないであろう。

口蓋音 g の代わりに z が体系的に使用され(Tinzu, Cinzu, Pinzu, Yanzu, etc.)、また時として口蓋音 c の代わりにも用いられている(Zansan, Zampa, Zagathai, etc.)ことは、ヴェネツィア人訳者を思わせる。Zだけが、そしてそれと結びつく小さなグループが、一貫してポーロに Marcus Paulo という実際に公文書で呼ばれている名を当てていること(cc.47r, 70v, 81v, 96v, 138v, 147r)は、一ヴェネツィア人——あるいは少なくともかの旅行家が暮らしていたところから遠くない者——を考えさせる¹⁸⁾。

ZはFよりより正確で保守的なだけでなく、内容的にもより豊かである。対応するものがFにない箇所(我々のテキストではそれに続く脚注に転記されている)は200以上ある——しかも大抵著しく長い——。上にみたごとくZがFより以前のものであることの様々な徴候からして、まず第一に、それらの箇所がオリジナルにはあったのが、誰か写字生あるいは複数の写字生たちの何重にもなった作業の過程で[Fで]削られてしまったのではないかとの仮定を示唆する。いかなる重大な理由もこの明白な解釈の障害とならない。

問題の箇所の多くは——上述の数字の約10分の6——ラムージョの版に再び見出される。対応する箇所の多さ、その大部分のほとんど文字どおりの対応¹⁹⁾、ポーロの物語中での配置の同一性、こ

れらはラムージョがZの兄弟稿を前にしていたことを確信さす。しかしそれはゼラダの所有に帰していたかの1400年代の稿本ではなく——いくつかの読みがより優れていることと²⁰⁾、いくつかの話の展開のもちろん元からのより優れた豊かさからしてそれではありえない——、おそらくもっと古い、いずれにしても形式においても内容においても祖本により忠実な同一版の一本である。文字どおりの一致を見せる極めて多くの共通箇所以外に、Zでは十分に展開させられている一つの話がRでは単なる荒筋しか対応していなかったり、あるいはその逆であったりする場合が希どころではないことを考えるならば、それら二つの稿本が兄弟であったことだけでなく、Zが多くの点で一要約であること、それにラムージョもこれまた何度か短縮されたテキストを前にしていたか、あるいは自分の原本の全ての部分に等しく同じ注意と同じ信頼を与えたわけではないということの証明が、同時に得られることになる。一方ではまた、彼が誤解²¹⁾と恣意的な拡大を避けえなかったことと、主底本にPを採用したがためPで削除されているポーロの書の最後の部分が全く考慮されなかった、ということを知らなければならない。

R (Z¹の反映として) とZは相互に結構良く補完し合う。Zはとりわけ後半において丁寧で完全であるのに対して、ピピーノの原本の反響かおそらく一つには疲れが原因で、その部分ではラムージョの注意はおろそかになっている。逆にZ¹は、Zが飛ばした前半の全ての章をRを通じて提供してくれる。したがって、Zが断片的なコピーであることは、今や確信してよいと私には思える。Zと対校すると、ラムージョテキストの圧倒的部分において、P, V, L, VBから提供された要素以外にそこに含まれている新しい豊かさが、唯一の典拠、もちろんかの編者がとりわけ誇らしげに述べている極めて古いギジ稿本、から汲み取られたものであることを確認することができる。Zがもはやそうした検証のために十分でない場合には、Zが欠落のあるテキストであり、完全版を想定しなければならないと見なすべき徴候が欠けていないにしても、Z¹以外の典拠を依るべき基準とするなどということができるだろうか。

もっとも、ラムージョの不確かで表面的な手法のことを考えるならば、ZとRの比較検討はZ¹の全体的な復元にも、ましてやZとZ¹がそこから由来するその祖本の復元にも十分ではない。ギジ稿本かそれに近い何か別の写本が発見されれば、不確かな点をさらに

訂正し、何らかの興味深い新記事を拾い集めることがきっと可能となるであろう²²⁾。

Zの重要性は、ラムージョが嘘を言っているのではないこと、すなわち彼の版を貴重なものとしている新記事の多くを本当に古いーラテン語写本から採ったことを証明するだけでも大きいであろう。しかもその重要性は、それがもっと重大な問題、すなわちそれら新記事そのものの信憑性の問題を解決する助けとなることを考えるなら、さらに大きなものとなる。実際、Rとは切り離して検討してみても、Zだけに含まれ、この我々の版によってマルコ・ポーロ研究者に初めて明らかにされる箇所において、Zはそれらがポーロ自身の手になるものであることの疑いない印を帯びているのである。

カラ・ホト **Khara-Khoto**、その遺跡から文化と芸術のあのような豊かさが明らかとなった‘黒い町’、それについてマルコ・ポーロが語っていないのは奇妙に思えるかも知れない。その廃虚を訪れ、マルコの沈黙にももちろん納得のいかなかったオーレル・スタインはそれを、ポーロが語っている町の一つ、第 63 章のエチナ市と同一視されるべきであるとの確信を明かにした。エチナをポーロが農業と牧畜を専らとする村のように語っていることからすれば、まことにもって大胆な同定である²³⁾。ところが、Zには実際に **Carachoto** <カラコト>の章があり、そこではなканずく同市の相当な文化的発展が記されているのである(LIX 27c)。

いま見たような事実があらゆる疑いを晴らすに十分であろうが、他の新記事とて証拠としてそれより劣るわけではない。マルコ・ポーロ以外の誰も、我々が CLVII 19 の脚注に再録したような希有な章を書くことはできなかったであろう。そこではマッテオとマルコは、その行動力と知識のおかげで好奇心に導かれて、民衆の儀式と信仰について探求する興味に満ちた本物の探検者としてついにその正当な光の中に姿を表し、偶像教徒の福建市のまっただ中にキリスト教徒の一大集団を発見するのである^{9*)}。全体に誠実さが息づき、口調は穏やかで純粹、細部は正確克明であり、そのいくつかはかの大帝国の宗教組織に関して歴史的に極めて貴重である。ロシアについての我々の新しい章 (pp.233-4 の注)を読む者は、それを実際に眼にしなかった者にはとても捏造したりすることはできないような細部の詳細さと豊かさにやはり打たれずにはおられないであろう。時がたってもはや様式化してはいるが眼にした記憶に、現地で耳に

した愉快的逸話、特徴的な土俗の言葉が織りまぜられている（ロシアの豪族たちの大酒宴を指すのにマルコが用いている *straviza* という言葉が純粹かどうか、ロシア語に *zdravica*＜乾杯＞という言い方があることを知れば、どうして疑えようか）。

かの大旅行家が、その作品の中で余りにも専ら支配者であるモンゴル人に献身的で、敗者であった中国人が文明の洗練さと思想の高貴性においていかに彼らに優れているかを見なかった、と非難した者がいた。「中国語を知らなかったものだからポーロは、なお持続し、モンゴル人の精神の貧困と野蛮で粗野な空虚さ全体の上にかぶさっている宋時代の中国の詩・演劇・小説の輝きに、間接的にすら気付くことはなかった……。マルコ殿は皇帝の無限の富と、贅を凝らした遊びと宴会を語るときのみ叙事詩的口調を帯びるのである」²⁴⁾。もしこれらの言葉が本当に打ち消しを必要とするなら、——これまでの『ミリオネ』でもそれを余すところなく反駁するに十分であるが——それは、私が発掘した新たな記述によって提供されるであろう。否である、決してマルコ・ポーロは古い中国の洗練された文明に口を閉ざしてはいない。彼はカタイ人が「風習の美しさ、学問と芸術の盛大さで他の国民に優れている」（我々のテクストの pp.101-2 注）ことを認めている——また別のところではカタイとマンジの間では習慣の違いはないとも述べている（p.131 注参照）——。彼らの常に高貴で優雅な物腰、礼儀、滑らかで雄弁な言葉を思い起こしている（同）。中国人の「百合の足」[纏足]のことも忘れていない（この忘却が咎められたものだ！）。カタイオの「乙女たち」の雅やかで恥じらいに満ちた優しさを褒め讃える箇所（pp.130-1 注）は、最も知られるに値する一節であることは確かであり、彼女らは「大層優雅に歩くから、片方の足はもう一方の足よりも指一本以上前に出ることは決してない」と描写する。今や我々は、マルコ・ポーロは中国を目にし判断したが、それはクビライの召使いや役人としてではなく、ヨーロッパ人としてキリスト教徒としてであった、と付け加えることができる。彼は、中国人がある種の悪習に染まっていることを見い出すが、その証拠を挙げることは絶対にしたくないと言うに止める（中国に関する後世の報告書でとりわけ僧侶に対して非難が向けられている恥べき風習をほのめかしたものか）。「魂のことを顧みず、物質的幸福と快樂のことしか考えない」と、彼らを非難するのである。また、いつものごとく宗教問題に注目するの

が見られる。Zは我々を中国の天上界に導き(pp.131-2 注)、偶像の数について語る。また、失くした物を見つける役目を果たす偶像たちの姿形と役割を描き、我々にその寺院の中を覗かさせる。そこでは、偶像の‘話し相手’を務める「細く低い」声の老女との対話の中で、キリスト教徒の神を信じるが魔術と悪魔をも信じるマルコ自身が、失くした自分の指輪をそうやって取り戻したことを告白している。これら中国人の生活と宗教に関する新たな独特の記事に、マンジでの復讐のための自殺、つまり来世に関する中国人の信仰でもってポーロが説明している自殺についてZが語っていること(CLIII 109w)、がつけ加えられねばならない。

今想起したごとき、近代の読者にとってかくも興味深いことどもがなぜポーロのテキストから消えたのか、もちろん確実なことは言えない。カラ・コトに関する章は、余りにもバカげていて子供っぽく見えるかも知れない民俗的特異性を備えている。ロシアについての章は、むしろ下品で冗談めかしたからかいと取られかねない逸話を含んでいる。カタイの処女についてのくだりは、きわどいことになりかねない医学的・法律的問題に直面する。残りは全て宗教論議で、したがって誰か転記者の多少とも臆病で知的な偏見にさらされている。紛失物の偶像にお伺いをたてたときの儀式を素晴らしい筆致でもって想起した後、マルコ自身が、おそらく半分嘘だろうが、次のように述べて前言を和らげざるを得なかったのではないだろうか:「私マルクスは、このようにして失くした自分の指輪を見つけたのだが、‘だからといってしかし何かお供えや賛辞を捧げたわけではなかった’」。实际的で自分を知的だと思っている読者にとって、マルコがあまりにも盲信的・空想的になっている章、語ることの歓びに我を忘れて、昔の思い出を記したり奇抜な風習を描いたり偏見を示したりでたらめな噂話を集めたりすることの歓びにふけてしまい、具体的な有益性が見られない章が削除される結果となったのはとりわけ自然なことであつた²⁵⁾。一切れの布のために通りすがりの商人に妻を娛しまさせ、彼らが立ち去ると、莫大な富を残さすうまくできた罫にはまったかのごとく彼らにばり雑言を浴びせかけるという(CXVIII 25e)、ガイन्दウのあの未開人の興味つきない場面がZにしか残っていないのは、まさにこの理由からである。以下の記事についても同じことが言えよう。家臣の善良さは土壤に由来すると賢者たちが言ったため、喧嘩早く乱暴な住民のいる別の地方

の土を持ち込んで絨毯の下に隠しておくいたところ、さっそく招待者たちの間でひどい取っ組み合いが始まったというケルマンの王の実験 (XXXV 23a)。船に乗る前に運命を予知するため、一種の鷲[凧]の背に酔っぱらいか気の触れた者を乗せて飛ばせるという、詳細に描写されたインド人の奇妙きてれつな迷信 (CLIX 34d)^{10*)}。ライオンや「パピヨン」に対するフジュ[福州]の住民の巧妙な狩の策略 (CLVII 10b)。キンサイの寺の一つでマルコが自分の眼で見たと言う魚の頭、奇跡的な引き潮によって干上がってしまった不思議な宿命的な魚の遺物 (CLIII 142z)。我々が銀や金の製品に対するのと同じ丁寧さと熱心さで、絹のナプキンやハンカチを保存したり織ったりするネクヴェランの未開人の素朴さ (CLXXII 5a)。船を永久に閉じ込めるアンガマン湾についてZが語っているところのあれほど魅力的なくだり (CLXXIII 9b) や、インド海を航海する商人が自分自身と貴重な商品を難破からいかに逃れるかを語っている箇所 (CXCIV 28f)、これらもおそらく単純で空想的な脱線と見なされたのであろう。

これらある程度の長さの、作品の残りの部分に対して比較的自立性をもった逸話から、その削除が筆記者の単なる不注意でもって説明できるより凡庸な新記事に移っても、それらがマルコ・ポーロの手になるものであることは同様に明らかであり、地理・歴史への貢献が貴重でオリジナルである点でも劣らない。ささやかだが具体的な情報で、一写字生の空想によって創り出されたとは認めがたいもの (XXXVI 26b, LXII 17d, CXVIII 32h, CXXXVII 9a, CXXXIX 16b, CLIV 24a, CLVII 10b, CLXXII 7c, CLXXIV 9a, 10b, CLXXVI 26b, 39d, CLXXVII 13b, 16c, 25d, 31e, CCII 8a, CCXXXIV 17a, LI 8b, LX 5b, CXIII 6a, CXLII 6b)。あるいはFでは要約的になっている記述 (CLIII 16d, CXX 28b, CXLII 5a, CLXVII 40g, CLXXIV 14c, 30i, CXCIV 60e) や、Fでは硬概的になっている観念 (LXXVI 31d, CLVII 9a, CLXIX 7a, CLXXV 186v, CLXXVII 36f, CLXXVIII 96e, CLXXXVI 3b, CXCIV 8a, CCXX 5a) を補い正確にして、時として真の意味をそれに訂正し、新たな細部を与えてくれるものなどである。

Rではほんの糸口しかないテキストが、完全な形であるいは少なくともはるかに広範な形で保存されているZのいくつかの章は、同様に本物の味を備えている(第一級の重要性をもったもとの箇所、

貴重で特徴的な部分が、なんらかの理由であるいはい何の理由もなく、写字生によって犠牲にされることのあった十分な証明、もし証拠が必要ならだが、である)。スコトラの海の鯨採りの長い詳細な章(CXCI 4b)は、Rでは慌ただしい数行に減っている。マーバールについての興味つきない章の中でも最も好奇心をそそる記事のいくつかは、Zにおいてその原初の形を再び獲得している。すなわち、借金取りに対処する方法(CLXXV 152s)、コイアク *coiach* について(同 168t)、道の安全について(同 198z)、偶像に捧げられた処女について(同)などの記事である。この処女たちについてZはその聖なる舞踏を描き、怒った偶像を鎮めるその歌詞のみならず、彼女たちを摘んで楽しむ時の料金まで記録——貴重極まりない記録——している。この最後のものは、転記者たちそれにおそらくラムージョ自身の‘羞恥心’に当然ながら触れる細部であった。我々の版の CLXXX 24 脚注に再録されている Z と R の箇所を対比されたい。それは、マルコがカイルの土豪たちの原始的な‘騎士道’を描いている写実的で生き生きとしたユーモラスな場面であるが、ラムージョには何か混乱した一節しかない。同様な例として、我々の版では以下の追記が読者に供されている：CXXVIII 15, CXLVIII 16, CLIII 32, CLX 36, CLXI 13, 14, CLXVIII 16, CLXXVII 7, CLXXVIII 88。

結論として——ZがRと共通する箇所、そのいくつかは内容の広がりと重要性において際だっているが、それらを別にしても——アンブロジャーナ写本には、それが読みの良好さと題材の全体性において、Fとそれに類する稿本よりもはるかにマルコのオリジナルに近い一稿本からくるものであることを断定するに十分な証拠が存在すると私には思える。

次にZがRと共通する部分に移るならば、それがポーロのものであることの明白さは、単にラムージョの新記事として知られていたときからすでに、それらの一つ以上にとって最も尊敬にみちた信頼を抱かせていた。すでに指摘したごとく、いかに絞滑な留保でもってラムージョの価値をおとしめようとしたところで、ラムージョのいくつかの記事はマルコ・ポーロによってしか書かれ得なかったものであることにピンと来ないというのは無理だったからである²⁶⁾。すでにユール (p.98) は、バラシャン高地の生き生きした描写、マンジの話し言葉の多様性への言及、オリエントの船の構造についてのいくつかの独自の記事、砂糖の精製を中国人はエジプト人から教

えてもらったとの情報などは、かの旅行家の筆にしか帰し得ないものであることを述べていた。これらはZにも含まれている箇所である。しかし、その純粋さが上に述べたごときあらゆる理由から疑い得ないZのような手稿本が発見された今となつては、ラムージョのいくつかの独自の記事にすでに認められていた、本物に違いないとの印象は、ラムージョがZの兄弟写本つまりZ 1から取ってきたものでありえる全てのものに、それを本物と認めるのをためらうことが少なくなるのは明らかである。Zが信頼に値するものであることは、もちろん次のものも信頼に値しえることを意味する：1) RがZと共通してもつ箇所、2) Zではごく簡単に記されているだけだが、Rでその全体あるいは少なくともより広い展開をもっている箇所、3) Rのみにあり、ラムージョと混ぜ合わされている他のどのテキストにもなく、Zがもし完全であれば疑いもなくそれを確認するであろう箇所。

我々の版でフランク・イタリア語テキストの脚注に補足した追加記事——Rという記号がほとんどどのページにも現れる追加記事——は、これらの結論が、いまや伝統的な敵意と不信から自由となった我々にどれほど広範で重要な題材に近づくことを可能にするか、否それどころか、幾分は変形され損なわれてはいてもマルコの言葉をじかに聞くことを可能にするかを読者に直接示すことができるのである。

2 ソランツィアーノ手稿 (V)

ベルリン国立図書館ハミルトン手稿 424a に保存されている奇妙なヴェネト語版 (V)、15 世紀の優美な紙写本、142 葉からなりその内最初の 2 葉は白紙、現状では最後の何葉かが落丁、この写本はZと密接な親戚関係にある²⁷⁾。書き出し：Qui chomenza il prologo del libro chiamato de la instizione (sic) del mondo. Vui signori inperadori duchi marchexi chonti e chavalieri et tuta zente qualle volete intendere e chonosser le diuersse gienerazione de li omeni e de le diversitade de diverse gienerazione del mondo lezete questo libro 結び (c.142r)：Questa zente ano gran quantita de pele ano zebelini i qualli sono de gran valore chomo io ve o dito ed ano armelini et vari e volpe negre e molte altre

chare pelle et sono tuti cha. かつてソランツォ蔵書の一部をなしていたもので、メルキオーリが『四つ折版写本カタログ』no.726(この番号は今も再装丁の背表紙に記されている)で、明らかに初期のヴェネツィア印刷本から示唆を得た勝手なタイトルで記載している: Polo Marco di Venezia. Viaggi orientali da lui fatti o sia delle maraviglie del mondo da lui vedute「ヴェネツィアのポーロ・マルコ。彼がなしたオリエントの旅あるいは彼が目にした世界の驚異」。また最後が欠落していることをすでに記している:「この章の残り約1面が欠けている。15世紀中頃に書かれたとみられ、139枚あり、細かいがきちんとした綺麗な字体である」(現第142葉には事実139と記されているが、確実に140の間違いで、おそらくこのテキストの枚数を数えるときにメルキオーリ自身が犯した誤りであろう)。この写本はその後、修道院長カノニチの蔵書に入った。第3葉下部の余白に(私の読み違いでなければ) Di Paulo Conti<パウロ・コンティの>との書き込みもある。最初の2ページは、1753年ゼーノによってフォンタニーニ『イタリア雄弁図書館』への解説の中で転記されている²⁸⁾。オリヴィエーリによって、前に引いたそのTA¹の版にいくつか脚註を付けるのに用いられた。

アンブロジャーナ図書館写本 ms. Y162 P.S. (紙、33x23, ff.156) は、これの忠実なコピーである。これもまた、我々にとってもうお馴染みのトアルド蔵書の一部をなす。c.155vに本文を書いたのと同じ手で、次のようにある:「この章の数行とロシアについて記したもう一章だけを欠いたまま、この手稿本はここに終わる。——1793年2月17日——。修道院長カノニチ殿の好意によりお借りしたこの写本は、D. ジュゼッペ・トアルド教授の求めにより、私ヴィンチェンツォ・マルキによってパドヴァにて忠実に模写され、さらに同氏によって一語一語照合された」。冒頭の注意書きによると、トアルドのためになされたこのコピーが「同人によってサン・マルコ王立図書館に寄贈された」ことになっている。寄贈の確かな決定を示す決まり文句ではあるが、その後の事件によってすぐに撤回されるはめになった。ここでも ms. Y161 でと同じように、トアルド自身の手で書き込みがある:「1797年4月と5月に起こった出来事のため手元に保管する」²⁹⁾。^{11*)}

題材の観点からはこの作品はFの第1-219章に十分規則的に対応しており、失われた最後の数葉には、今に伝わる唯一のフランク・

イタリア語テキストの最後にみられる残りの 15 章も訳されていた可能性が高い。話は時々短縮されている。第 118 章(43-8 行)の最後の部分が削られている。コマリについての短い章が欠けており、エリについての章に誤ってコマリのタイトルが付けられている。全体として内容の豊かさからして V は、FG に次いで F から遠ざかることのより少ない版である。

これが、後世のしかも考えられないほど不正確な一本でしか伝わっていないのは残念である。というのも、無数の書き間違いのいくつかは最後の写字生に帰すことができるにしても (san を sal, biade を bovi, salsa を salda, dirupada を diputada, sazo d'oro を sacho d'oro, ebano を alboro, oro を oio, monti を morti, chavai を chavi, milic を milia, chavalli を chavalieri, rat de faraon を gati de faraon, aden を india, cuoro d'orso を cuoro roso 等々)、他はそれ以前の一連の誤りを想像さすからである。例えば c.90r:「ここを発って南に 2 日行程進むと沢山の町と城市があり、そこには‘沢山の町と城市に向かう沢山の道があり、多くは人が住んでおり、多くは誰も住んでいない。さて、2 日行程の最初にある大街道に戻ると’、ジングルと呼ばれる町がある」。多少とも太くて長い canne<葦>〔竹〕について語っている F の CLV 18-23 から、どのようにして確かにそこに相当するこの V の箇所に至ったのか、その過程を再現するのは容易でない。cane<葦>が caue と書かれ、ヴェネツィア人写字生によって calle<路>と読まれ、そこから strada<道>となり、それにまつわってさらに発展した、ということは有り得るであろう。c.91v にはバカげた一文がある——「この町はフグイ〔フジュ:福建〕領の首府でコンカと呼ばれ、la qual nonn a porte<門がない>」…。この箇所には少なくともそれ以前の二つの読みが前提となる。一つは正しいが完全でない la qual e nona parte<これはその 9 番目の部分である>、もう一つは完全で、la qual e nona parte de la provincia del Manzi<これはマンジ地方の 9 番目の部分である> (cfr. CLVII 3) である。その他 V の実際に理解不能な少なからざる箇所は、おそらく一連の誤解の積み重ねの結果であろう。

V がいかに哀れむべき崩れた形で今に伝わっているかは、その写本の無数のびっくりするような箇所のいくつかを、それに対応する F の行と対校しながらでなければ、とても示すことはできない。F の対応箇所は、いつものごとく私の版に譲ってここには引かない。

XL 18-9:el dito vechio non volea che nesun intrasse nel dito zardin se no homeni chativi e de mala vita.「その老人は、悪行にいそしむ悪人でなければ誰もその庭に入ることを望まなかった」
 LXXXI 26-8:questo ano una tola d'oro de sazi trexento in la qual sono schrite le sopra dite parole et soto de la dita tavola sono schorpito uno lion e sovra quello sono le mane del soldan et la luna et i brevillezi del gran chan et el chomandamento.「この者は 300 サッジの金牌を持っているが、そこには前述の言葉が書いてあり、牌の下部には一頭の獅子が刻まれており、その上にスルタンの手と月とグラン・カンの権限と命令が書いてある」 LXXXIII 8-9:el gran chan quando el vien a morte dano de le sue chonchubine a suoi fioli mascholi i qual erano homeni savi e valenti ne l'arme.「グラン・カンは、死に際して側室を聡明で武勇に優れた息子たちに与える」 XCI 13-4:li manda le pelle chonzade azo che 'l signor faza de quelle choltre de quelle ch'el dorme.「なめした皮は、眠るための物の覆いにできるよう主君に送る」³⁰⁾ [以下略]

V が伝えられているこの悲惨な状態を正当化するのに、転記者たちの不注意のせいにするだけでは十分ではない。上の引用箇所はいくつかは、フランク・イタリア語のオリジナル——多分すでに良好ではなかった——が、知性に欠ける翻訳者によって正しく解説されず、バカげた形で誤解されたことを窺わせる。Le mani del soldan e la luna<スルタンの手と月>は、F では *hi est images le soleil et la lune*<太陽と月の絵が描いてある>であり、何かより古典的なフランス語の異形 *l'imaïne du soleil et de la lune* を考えさす。グラン・カンが側室を息子たちに譲ることを想像するためには、訳者が F の a に動詞「持つ」ではなく前置詞「に」の機能を与えたのでなければならない。F で *beisognes de fait d'armes et de ostes*<軍事と軍隊の必要なこと>とあるところで、V ではなぜグラン・カンの眠るベッドのカヴァーについて語られているのかは、*darmes*<武器>を *dormes*<眠り>と誤ったと推定すれば説明できる。c.53r の謎の *li vien metudi incheba* は、F のそれに劣らず謎めいた *il les portent en une cuble* を機械的に写したものであろう。c.122r に *ano chazaxon et oxelaxon et sono molti oxelli diversi dai nostri chiamati chandanzie*<狩猟と鳥猟を行うが、‘カンダンツィエ’と

呼ばれる我々のとは異なる多くの鳥がいる>とあるが、F CXCII 21 では *il hi a diverses oisuaus, ce est devises as nostres, que ce est mervoille*<驚くべき様々な鳥がいると我々に‘語られた’>とあるところからして、誰か写字生の誤りも加わって、イタリック体の二つの表現は同じだったのではないだろうかと考えてみてよい。VにはFと同じく *telle derens* の形が見られる。Fの *voces*(=*foce*<溝>)に対して *fossa*<溝>である。F III 12-3 に対応する箇所は、Vでは *una parte e l'altra feze suo forzo de zente et vene ai luogi uxitadi di guere che ognuno potia far la sua bataia*<双方が軍隊を集め、‘それぞれが戦闘できるよう野戦場にやってきた’>と奇妙な発展した形となっている。これは、Vのモデルとしてフランク・イタリア語版を認めなければ理解不能である。つまりそこには、*ensenle* か *ensemble*<共に>ではなくFのように *il se combatirent ensele*<彼らは互いに戦った>とあり、それが *en se le* と読まれ、*nei loro luoghi*<彼らの地で>の意味で *en se leu*<その地で>と訂正されたのであろう。

一フランス語テキストの反映は否定し難いが、一方では多くの点でVのFとの本質的一致もそれに劣らず否定し難い。しかし、その前のラテン語テキストの痕跡も劣らず明白で確実である。最初の章の一つですでにつきのような興味深い記事に出くわす：「*Jaza*<イヤザ=ライアス>という町に来たマッテオとニコロは船に乗り、何日もして *Anchona*<アンコーナ>に着いた」。そして、「アンコーナにいたさる聖職者のもとに行った……その御方は聖地すなわちエルサレムに赴くためアンコーナに来ていた」。アクリをアンコーナとする取り違えはさらに何ページにもわたっている。これは、*Acri*<アクリ>の代わりにラテン語形 *Accon*<アッコン>があったのであれば、起こり得なかったことは明らかであろう^{12*)}。c.47r でクブライについて、「*Cholaichan*<コライ・カン>は *deus dominazio*<主なる神>すなわち支配する全ての者の主と呼ばれている」とあるのは、*dominus dominantium*<主の中の主>の縮約形の明らかな反映であろう。c.121r に、ザトリックは「*suo*<その>教皇と何の関係もなかった」とあるが、この *suo* は、元の *sommo*<至高の>の短縮形を確実に反映している。アルゴンの解放者(138r)は、「アルゴンが捕らえられていた *a panpaluna*<パンパルーナに>他の諸侯とともに」向かうのだが、この奇妙きてれつな地理記述は、きっと *a*

panpilionem<パヴィリオン／天幕に>から生じたものであろう (F:au pavillon)。「その地方から s'en part<発って>」(CXXV 2)の代わりに「その地方から se desende<下ると>」(c.74r)とあるのは、中間に disceditur<出立する>とあったことを想像さす。時に V は F と正反対のことを言う、(例:c.49v「夜は家に帰ら‘ない’」; c.83v「紙のお金を持た‘ない’」。これはきっと、全くつなぎ辞的な vero<つまり>の短縮形が、non<ない>と読まれたのであろう。F XCVII 5 以下の buce<皮>が buzian(c.56r)となるためには、その前に多少ともラテン語的な buciam<皮>を必要とする。次のこれ以上ない奇妙な箇所を吟味されたい:「彼は虫がそれから絹を造る桑の樹の皮を採取させるのだが、最初の皮の下にあるその皮はとても薄く、海の果物〔海産物〕のもとにあり、その言語で buzian と呼ばれる」。

我々は、V は一フランク-イタリア語テキストのラテン語訳からのヴェネツィア語訳である、と結論すべきだろうか。それとも二つの異なる版、一フランク-イタリア語版と一ラテン語版の上に作られた集成テキストと見なすべきであろうか。

それからの由来が直接であろうとなかろうと、V がその遠いまた定形のない反映であるフランク-イタリア語テキストは、無視していいどころではないことは明らかである。今見たばかりの欠陥にもかかわらず、その読みが F の復元に役立つ場合は少なくないし、他の権威ある版の異形を確認したり、それ自体でより適切な解決を提供してくれる(例:LXIV 2,9, LXIX 35, LXX 85, XCVI 33, CXXIV 14,37, CXCH 51, LVI 16, LXIX 26, LXXIII 9, LXXX 16, CI 2, CVIII 7, CLXVII 45, CLXXXI 31)。Z との一致はとりわけ顕著である。F に対して共通する少数の誤りを別にしても、もっともそれらは独立して犯されたものかも知れないが(erberges を erbe, oisi を ossa その他)、F に対して同じ異形を提供する場合は頻繁であることに印象づけられずにはおれない。その場合、F とは異なるが文体的に同一の原本があったことは明らかである。いくつかの興味深い欠落もそれに劣らず印象的である³¹⁾。Z とのこの親戚関係は、いくつかのオリジナルの読みの保存のみならず、Z をフランク-イタリア語稿の貴重な補完物としている新記事のいくつかが生き残っていることをも意味する。我々の版の pp.5, 14, 15, 17, 18, 23, 44, 47, 49, 58, 59, 110, 124, 159, 172, 177, 185, 188, 191, 197, 201, 221 に記した平

行関係を見られたい。Vの文は一度、Zに欠落していた数行を満たすのに役立った (p.49)。一方Zは、Vのひどく崩れたテキストを理解するためにしばしば天の援けとなった。

Vのポーロの手になる可能性のある 30 ばかりの箇所は、FにもZにもない。それでその今の崩れ方がどうであれ、私のテキストの脚注に再録するのが適当と思えた。その実際の価値についてはその場合場合に決めて戴くよう、思慮深い読者に任せる (pp. 8, 9, 32, 37, 47, 56, 84, 86, 87-8, 135)。あるものはLにのみ対応箇所がある (pp. 50, 55, 61, 72)。他のものはLにもRにも共に反映している (pp. 10, 23, 41, 43, 45, 46, 63, 80)。かなりのものはRにのみ再び現れる (pp. 4, 8-9, 12, 12-3, 45, 49, 52, 62, 85)。VとZのさっき見たばかりの類似性からして、ある箇所がただVとRにのみ見られる場合、RがそれをVではなくZ¹から取った可能性は排除できない。いずれにしても、しばしばその読みを他の典拠の読みと混ぜ合わしたり、その特徴的な異形の中からいくつかを自分のものにしたり (例: LXXIII 9, CVIII 7) して、ラムージョがVを組織的に利用したことは確実である。したがって、今述べている特別な点についても、VとZ¹ (p.23)、VとL (p.63) といった異なるテキストが融合したものである可能性はある。たとえ彼が、今に伝わっているものとはいくらか異なったVの一稿本を前にしていなかったとしてもである (pp. 12, 80)。

3 フェッラーラ要約とその同類稿本 (L)

Zと遠からざる親戚関係にあるもう一本、極めて興味深いラテン語要約 (L) もVに劣らぬ重要性を有している。フェッラーラ公立図書館 ms. 366 NB5, ヴェネツィア市立コッレル博物館 ms. 2408 (cod. Cicogna 2368), ヴォルフエンビュッテル市立図書館 ms. Weissenburg 41, アントワープのプラティン・モレトゥス博物館 ms. 60 に含まれている。これら四つの手稿の存在はマルコ・ポーロ研究者に知られていないわけではなかったが、それらがほとんど全く同じで同一のグループに属することは、今まで誰も指摘しなかった。

フェッラーラ手稿 (マルコの書のみを含む、26 葉、密な一欄組、凡庸ならざる書体) は、おそらく 1400 年代始めのものだが 14 世紀末の数十年の可能性もある。書き出し (c.1r): *incipit prologus libri*

qui vulgari hominum dicitur Elmeriole -- Nobilis et discretus vir dominus Marcus Paulo de Venetiis, cum 26 annis continuis in partibus maioris Asye permansisset, diversa valde et longinquas perambulando provincias, tanti beneficii non (*scr. mo*) ingratus, diversos hominum mores mirandaque multa que vidit et audivit etiam reliquis communicare disposuit. 「俗にエルメリォレ [イル・ミリォン] と呼ばれる書の序文ここに始まる [以下略]」。結び (c.26r) : Tandem Bercha cum gente sua impotens substinere bellum fugam arripuit; Alau vero victor permansit. Hii tamen reges proximi parentes erant et ambo Cinchini imperiali progenie descenderunt. -- Deo gratias. Amen. Explicit liber domini Marchi Paulo de Venetiis. 同手稿はフェッラーラの文人レリオ・グレゴリオ・ジラルディの所有になり、彼は自らの名とともに購入の日付を書き込んでいる：本屋パリーデより、1535年6月、「皇帝カール5世が海賊バルバロッサに対して……勝利を収めし時」。この「フェッラーラの本屋ベンティヴォリにあるかつてレリオ・ジラルドのものであった一テキスト」について、フォンタニーニはその『イタリア雄弁図書館』の中で、ピピーノ修道士の訳の単なるコピーと述べている。この情報は、多かれ少かれ文字どおりポーロ研究者の大部分によって繰り返された³²⁾。

チコーニア写本は³³⁾、マルコの書 (cc.9r-36r) の他オドリーコの作品 (cc.37r-46v)、詩その他様々なもの (cc.1-4, 47-52) を含んでいる。ポーロの部分は一欄組の丁寧な転記で、余白に赤で見出しが繰り返されている。羊皮紙の表紙には、Marcus Paulo cum vita beati Odorici「マルクス・パウロ『と福者オドリクス』の生涯」とのタイトルが付いているが、一方ポーロの作品の最初にある本文のタイトルは、「大アジアの様々な地方と王国についてならびに住民たちの様々な習俗とその地の多くの驚異についてのヴェネツィアのマルコ・ポーロ殿の書の抜粋と翻訳」とある。書き出しは前の書と同じ：Nobilis et discretus vir etc. 結びは：Alau vero victor permanssit. Hii tamen duo reges proximi parentes erant et ambo ex Cinchini imperiali progenie descendentes.続いて同じ手で、二行頌詩：「かの御子、なべて善き備えあるところに、我らを連れゆかん／その御子、祝福されたる生みの親にして処女、天の宮居に連れゆけり」、それにこのコピーの発端にまつわる貴重な後書きがある：

「我らが主イエス・クリスト生誕の 1401 年、インディクティオ第 9 年、2 月始め 4 日日曜日、夜の 5 時、暖炉白く、永遠なる神と、そのいとも優しく豊かで輝かしき生みの親処女マリーア、はたまた栄光にみてる使徒たちの司僕の杖を携えたるペトルス、フィリップス、イアコブス、全ての諸侯の勝利の法廷を敬して、アーメン。私ことペトルス・ムレートゥス・デ・フォガンの子フィリップス、パドゥアの町のフォロイウリス地区に住む、帝国公認の公証人、上述日時に本書を書き完成せり、かつてサンクタ・ルキア学校において高名なる貴人マリヌス・デ・ラカナティス師のもとで学び、修辞学を修めり」。次いでこの書はフリウーリの学者ジャン・ジッゼッペ・リルーティのものとなり、彼は第 8 葉表にラムージオの献辞書簡に想を得たいくつかの感想と、加えてこの要約はピピーノのテクストの上に行われたのであろうとの見解を書き記している。その後、エマヌエーレ・チコーニアの著名なヴェネツィア記録文書集に収められた。

レッシングによって最初に報告されたヴォルフエンビュッテル稿本は、これまた 15 世紀のもので、紙、二欄組み、書体は十分に優美である。いつもながらの著者たち、リコルド、ヤコブ・ド・ヴィトリー、ジョヴァンニ・ディ・ピアン・デル・カルピネら収める雑録集の ff.120-160r を占める^{3 4)}。書き出し：Incipit itinerarius nobilis et discreti viri domini Marci Pauli de Venetiis de regionibus et partibus maioris Asyae necnon de ritibus et moribus hominum earundem -- Nobilis et discretus vir dominus Marcus Paulo de Venetiis etc. 結び：Hi tamen reges erant proximi parentes et ambo ex Cinchini imperiali progenie descendentes.

アントワープのコピーは、1400 年代の一羊皮紙写本(18x28)の大部分(ff.1-118)を占めている。装丁の裏に記された様々な書き込みのうち、唯一つが本文を書いたと同じ手になる：「フランク人の聡明にして力強き王カロールス・ルートヴィヒ自身／真の平和を享受して君のところにやってきた」。書き出し：Extracta de libro domini Pauli de Veneciis de diversis provinciis et regnis maioris et de diversis moribus habitantium et de multis mirabilibus in hiis locis et Asye (Asye<アジア>は明らかに誤って maioris<大>から切り離されている)。Nobilis et discretus vir dominus Marcus Pauli etc. 結び：Hii tamen reges proximi parentes erant et ambo ex Chinchini imperiali progenie discendentes. Explicit. f.1 に

1600.3.22 の日付と *Abra. van. der Vequen* の署名が見える。この名前は f.131v でも、「アントワープ人 *Abraham van der Veken* は我が主人」と繰り返されている。次の葉には、「本書は *Nicholao Le Hugueteux* の所有になる」と書かれている³⁵⁾。

今挙げた四つの稿本のうち最も古いチコーニア稿本とフェッラーラ稿本は、互いに独立している。両者に共通するいくつかの明らかな転記間違い、また双方の写字生が時々自分のモデルの解読において示す不確かさから、それらとこの小グループの祖本の間にすでに若干崩れた同一の稿本があったと想像することができる。残りの二つの写本は極めて似かよってているが、フェッラーラ稿本よりはわずかながらチコーニア稿本により近い³⁶⁾。

マルコの手から作られた全ての要約の中で、疑いもなくこれが最良である。F に極めて近い一フランク・イタリア語テキストにのっとって作られているから、我々の第 1-226 章の内容が要約されており、その題材のまさしく本質的なものを保ち、ポーロの他のラテン語版とははっきりと異なる簡潔で力強い形で、敬意とそのうえ知的な忠実さでもって作者の考えに添っている。この要約のモデルがフランス語版であることと、今に伝わる諸テキストの中でこれが占める位置は、要約者が理解せずして正直にあるがまま再生したいいくつかの表現がそのまま残っていることから十分に証明される：III 18: *sperantes ad taesse tandem reverti posse* < やっと ‘横切って’ 帰れると期待して >, XL 8: *quedam magna planicies in qua est arbor seul quam cristiani vocant arbor sicca* < キリスト教徒が乾いた樹と呼ぶ ‘唯一の樹’ がある大平原 >, XL 10: *eius fructus sunt ricis similis ricis castanearum* < その果物は栗のイガに似た ‘イガ’ である >, XLI 3: *sonat in lingua nostra de serram* (ms. *Cicogna serrain*) < 我々の言葉で ‘セッラム [サラセン] の’ を意味する >, LXI 7: *magna provincia Jereraus in qua est hec dicta provincia* < 今述べた地方のある大 ‘イエレラウス’ [ウィグリスターン] 地方 >, LXIV 5: *tartari manebant in partibus septentrionis in loco dict Trociorcia* (F: *demoroient entro Ciorcia*) < タルタル人は北方の ‘トロキオルキアなる地に’ 留まっていた (F: チオルチア [満州] 内に住んでいた) >, LXXXIV 46: *longe a pallatio circa unum atalentum* < 宮殿から ‘約 1 射程’ 離れたところに >, XCIV 75-6: *statque magnus canis in hoc loco usque ad strimevolie quod tempus est*

circa pascha nostrum resurrectionis<また大カーンは我々の復活祭頃の時期にあたる‘春まで’この地に滞在する>, CII 3-4:bibunt vinum quod faciunt ex rico et aliis quam pluribus speciebus que omnia bulliunt taliter quod efficitur in modum vini<米やその他できるだけ多くの香味料から造ったブドウ酒を飲むが、‘それを全て沸騰させ’、葡萄酒のように造られる>(我々が laborent<手を加える、調味する>の間違いとみる F の laboient の解釈の試み), CLXXXV 25:narcos pulchellime aureo et argenteo filo consutos<とても綺麗な金と銀の糸で織った‘ナルコス’>, CCXVIII 34:quas in partibus nostris appellamus troias<それを我々の地では‘トロイア’と呼んでいる>(もちろん treias<そり>の間違い)。フランク-イタリア語版の現存コピーとのこの近さからして L は、F の復元と正確な理解にとって FG, TA, VA と同様な貢献をしばしばもたらししてくれる(例: XVI 3, XXXII 20, LVI 8, LVIII 43, LXXXI 27, LXXXIV 10, LXXXVI 3, XCIII 60, XCVII 9-10, XCIX 5-6, CXCIV 94-5)。しかし L は、Z、R、V によって示されているさらに広範な版の少なからざる痕跡を保っているという点で、それらに優っている。F に対して L が有している新たな箇所は、要約であるため残念ながら往々にして Z と Z¹ に現れるその記事に見合った大きさを備えていないが、しかし時として小さからざる興味を備えている。Z (我々の版の pp. 40, 128, 172, 176)、あるいは V (pp. 50, 55, 61, 71-2)、あるいは Z と V の両方 (p.47) に書かれていることを多少とも同じように繰り返している箇所、あるいは Z と R (pp. 49, 205)、あるいは V と R (pp. 8-9, 10, 38, 43, 45, 46, 61, 63,80)、あるいは Z、V、R (pp. 5, 16, 18, 32, 41, 44, 172, 185) に同時に確認される箇所の他に、L だけ (pp. 4, 5, 39, 43, 48, 56, 61, 88, 119, 120, 125, 126, 158,231)、あるいは L と R (pp. 17, 61, 113) に見られるものもある。

ラムージョのテキストが L と関係のあることはもう何度も指摘された。そのことは最初にレッシングがヴォルフエンビュッテル手稿にまつわって一般的に述べた:「この写本を対照する必要は、しかしながらそれほど大きくはない。というのも、それかそれに類するものがすでにある人によって用いられているからである。もっともポーロの書に関するその人の功績は、一度も正しく知られたことがないか、それとももうとっくに忘れ去られてしまっている。その人と

は、ラムージョである」。一方ユールは、チコーニア写本を検討してみ、それをRの主底本の一つに数えることはできないと考えたが、同時に、ラムージョがそれを用いたことと、あまり重要でないその新記事の少なくとも7つはそれに負っていることを示した。我々が明らかにした一致――20以上――と、とりわけLとRだけが対応しているところは、私の考えでは、Lがラムージョテキストの典拠の一つであるとの仮説を確かなものとする。しかしながら、ZおよびVとのLの否定すべくもない親戚関係からして、Rが、Lと共通に持っている箇所いくつかをLからではなくZ¹か、あるいはVの何らかの失われたコピーから採った可能性もまた否定することはできない。ある点で、Lを何か他の典拠と混ぜ合わせたということも有り得る（例:p.181）。

4 Z・V・Lの共通の起源

上に述べた特徴からすでに、いくつかの重要な要点を定めることが可能となる。

1) Z, V, Lは、これまでの章で検討した諸家族に対してそれだけで一つのグループを構成する。すでにみたごとき共通して有する多くの新記事の他に、Fに対して典型的に異なるいくつかの読みにおいて一致していることを考えられたい（例:XXIII 29, XXXII 23-4, XLVIII 45, CLXXVI 47, CLXXXI 21）。これら三つだけの間で検討しても、VとLは、すでに指摘した共通の新箇所においてのみならず、テキストの特徴的な一致においてもZと強い関係を有している（例えばVだと LXXII 34, CXXX 15, CLXVII 45, CLXXVII 25, CLXXX 5, CLXXXVII 4, CXCVII 17, 18, CC 22, 43, CCIII 12, CCXVIII 6, Lだと CLXXII 1, CLXXXII 5, CLXXXV 30-1, CXC 17, CCXIX 18）。

2) 一方VとLは、ZとZ¹に対して別の下位グループをなす。他に見られぬいくつかの新記事の共有と、いくつかの形式上の共鳴の明白さ以上に、内容の同様な貧困化からそのことが納得できる。つまり、ZとZ¹特有の貴重な価値を形成している箇所の大部分がどちらにも欠けている。削除があるだけではない。そうした題材が、かすかなほのめかしや謎めいたこだまとなっている（Vだと我々の版の pp. 185, 221 の註、Lだと pp. 172, 176, 185 の註参照）。

3) 三つとも、語法と配列において現存の F に全体として等しいがいくつかの点でのみ著しく豊かなフランク-イタリア語テキストを前提としている。

4) 今日 Z と R (Z¹ の反映として) によって示されているラテン語版、それはおそらくオリジナルの完全さに極めて近かったであろうが、その基礎となったテキストの豊かさが現在の V と L においてはほぼ同じような形で減じていることと、あれほど V に近い L がフランク-イタリア語テキストから直接由来することからして、フランク-イタリア語版の歴史においては、原初の形と今日 F に保たれている形との間に、V と L がそれぞれ独自に対応する中間の形が存在していた可能性が高い。

5 後世のヴェネツィア改作版 (VB) におけるおそらく同じ典拠の反映

ヴェネツィア市コッレル博物館 ms. Dona delle Rose 224 は、cc. 229r-279v に、今までに取り挙げたどのヴェネト語版とも根本的に異なるマルコの書のヴェネツィア語改作版を含んでいる³⁷⁾。その前に、言語と文体でこれによく似たペトラルカの『著名人について』*De viris illustribus* の訳があるが、たぶん同じ改作者の作品と見られる³⁸⁾。‘結び’には、おそらくまずその転写の時のものと思われる日付がある：Explicit liber Milionis civis Veneciarum. Explecto MIIII c XLVI mensis setenbris die vigiesimo octavo <ヴェネツィア市人ミリオンの書ここに終わる。1446 年 9 月 28 日了>。別の手で第 1 葉上部に Meser Marco Polo | la so lezenda <マルコ・ポーロ殿 | その物語> と書かれている。書き出し：Quegli che disederano de intendere le meraugioxe (sic) chose de la grande Armenia Persia et Tartaria, de le Indie et diversse parte del mondo legano questo libro et intenderano quello che 'l nobelle citadino veneciano miser Marcho Pollo, avendo cerchato tute le dete provincie, volse tute meraveioxe in quelle trovate, a dilleto di letori, in questo libro scrivere. 結び：In quella bataia da una parte et da l'altra mori CXXm homeni, feriti e guasti infiniti. Parmi avere assai narato de le chosse per me vedute e veritevelle mente udite da degne e veritevelle persone e pero i faro fine.

ヴァティカン図書館バルベリーニ写本 ms. lat. 5361 の cc.260-5 に、*Alcuni primi capi del libro di Marco Polo copiati dall'esemplare manuscritto di Paolo Rannusio* 「パオロ・ランヌージョの手稿本から写されたマルコ・ポーロの書の始めの数章」がある。*Dona' delle Rose* 稿本に伝えられているのと同じテキストである。写字生は序章の数ページとアルメニアの章を写すにとどまっているが、幸いにもその原本の最後のメモをも書き写してくれた：*Explicit liber Millionis civis Venetiarum. Explectus fuit sub anno domini millesimo quatragesimo quinquagesimo quinto mensis novembris die vigesima septima.*＜ヴェネツィア人ミリオンの書ここに終わる。主の 1455 年 11 月 27 日了＞。とすると、今に伝わるもの以外に、所有者が‘パオロ・ランヌージョ’、もちろんかのマルコの編者の息子で彼もまた知られた研究者だった、とあることからして、おそらくジァムバッティスタ・ラムージョのものであった一コピーが存在していたことになる³⁹⁾。

大英博物館 ms. Sloane 251, 紙、2 欄組、cc.39、書体は極度に個性的で難読は⁴⁰⁾、同テキストの完全なコピーである。‘書き出し’は *Dona delle Rose* 稿本に同じで、*tute meravigliose in quelle trovate*＜そこに見られるあらゆる驚くべき事ども＞という、欠落のあるあるいは間違った表現まで含まれている。同じ結びの文のあと転記者の書き込みが続く：*Explicet liber milionis zivis vineziarum. — Questo libro scrisse Salvador Paxuti (読み不確か) del 1457 a viazo de Baruti patr. miss. Cabuel (読み不確か) Valaresso*⁴¹⁾ *chapit. miss. Pollo Barbarigo.*＜ヴェネツィア市民ミリオンの書ここに終わる。——本書は 1457 年バルーティの旅でサルヴァドル・パクスティが記した＞^{9*)}。

今に伝わる完全コピーは上の二つだけで、互いにとっても近く、おそらく同じ原本に基づいており、少なくともより古い一稿本を想定しなければならないが、この小グループの祖本をさらに正確に決定する手掛かりは何もない⁴²⁾。

これらに残っているテキストは、全体として我々の F に同じフランク-イタリア語テキストの訳である。訳者は、好き勝手に縮めたり膨らませたりして全く自由に進めている。すでに欠落のあるコピーを前にしていたのでなければ、はっきりした理由もなく我々の第 44, 154, 201-217, 219-228 章を省略している。ナヤンに対する遠征のあ

と都へのクビライの帰還を語る第 81 章に至った後、大巻き狩の後のやはりカンバルクへの皇帝の帰還を述べる第 95 章に飛び、こうして重要な 14 章を切り捨ててしまった。F の最後の 6 章は、極度に概略的な唯の一章にされている。第 156 章の 1-12 行は、c.261r と c.264r に二度訳されている。題材のもとの配列はごく頻々と変えられ、別の章が一つにされたり、一章が二つかそれ以上に分けられたり、第 125 章と 126 章が入れ替わったりしている。

これが一フランク-イタリア語オリジナルから由来するものであることについては、疑問の余地はない。訳者は、goves<腕尺>、cators<ウズラ>、caucie<堤防>など理解できなかった語彙をいくつかそのまま残している。VB(c.257r)に *chaminando una cornada inver l'ixolla*<ある地を‘島の方に’歩むと>とあるところは、F では *il ala ver yseloc une jornee*<‘南東の方に’1 日行程進んだ>であり、これは *yseloc*<南東>を *yselot*<島>と読んだことからのみ起こり得るものである。他の間違いは崩れたフランス語テキストをもって説明できる。*fuorche il dorso*<背を除いて> (LXXIII 12)が *sopra el dorso*<背の上に>となっているのは、もちろん *for* を *sor* と読んだためである。*trovassi chuori in gran quantita e molto belli e grandi*<chuori が沢山またとても美しく大きなものがある> (CXII 15-6:*il ont de toutes chouses que as cors d'omes beisogne por vivre en grant abondance*<彼らは人間の‘体’にとって必要なあらゆるものをとても豊富に持っている>) は、*cors*<体>の正しい意味がもはや現れていないことからして、十分に欠落し変形したテキストを想定する他ない。形だけの一致も時として著しい。*Nasence* (皮膚の出来物の意) を *nasiun*<誕生>、*lengajes mout gref a entendre*<とても聞き取りにくい言葉>を *lenguazo molto grave*<とても重々しい言葉>、*demorent as montagnes*<山に住む>を *stano alle montagne*<山にいる>などである。

VB が用いたテキストが、我々が有している稿本すなわち F と読みにおいて極めて近いことも確実に断定できる。F と同じように、*levant*<東> (XXIII 7) ではなく *ponent*<西>、*seje*<賢者> (LXIV 2) ではなく *sire*<御方>、*laborent*<煮る> (CII 4:*fano boglire i rixi*<米を煮る>) ではなく *laboient*<手を加える>とある。F と同じ特徴的な欠落がある：LXX 39 (*et chusi vano desendendo de diexe in diexe*<こうして 10 [100] から 10 へと下

ってゆく>), CVI 6 (Io cunsi a una villa molto richa e bella ne la qual io riposai per alcuni di et apresso a questa villa per lige XII ...<私はとても豊かで綺麗な‘町’[カンバリク]に着き、そこで何日か休息したが、その‘町’から 12 リーグのところに・・>), CLXXVIII 93-4 (sono ancho una regolla che demorano in aqua per servire i soi idoli<偶像に奉仕するために水の中[僧院]に住むという規則もある>)。

いくつかの欠点はオリジナルにまで遡ることを認めるにしても、この作品を全体として見ると、残念ながら我々は極めて芳しくない翻訳を前にしている。尊大な無意識でもって進められたやっつけ仕事の、翻訳といわんよりは書き換えであり、おそらくもう子供に戻りかけた誰かおしゃべり好きの老人の仕事であろう。山なすでたらめ、まさしく仰天すべきバカげたことの成果の傍らに至るところ趣味の悪い言い替え、大言壮語の誇示、恥知らずな捏造が見られる。この無名のヴェネツィア人は、マルコの書を自分の物のように扱っている。加えたり削ったりするだけではない、原本の素直な単純さの上に愚かな文学的上塗りを施す。彼が得意げな冗長さで引き延ばす箇所は、当然膨らまし屋たちに気に入る箇所、つまり軍事遠征、衝突そしていささか下品な場面である。そうしたところでははた目にも喜々と満足して取り組んでいるから、時として何か気の利いた発見を我々に提供することもある。例えば、自分の妻が客人の娛しみに身を任せた後のガインドゥの夫たちの帰宅を次のように想像する:「他所人が立ち去ると主人が帰ってき、家族がすっかり満足し楽しそうにしているのを見て、そのことで客人に施したあらゆる快樂のことを自分に話させて楽しみ、皆で喜んで神々に感謝を捧げる」。マアバルの聖なる踊り子たちに興味津々となるあまり、彼女らの「微妙な飲物」を載せる「純白のテーブル掛け」を我々に思い起こさせる。仏陀に現世の快樂に興味を覚えさせようとする父の虚しい試みを語るときは、ロマンチックな絡まりを思いついて楽しむ:「自分の国にいた一番美しく可愛い娘たちを見つけ出させ、その女たちに息子の世話をさせ、‘最初に息子と床を共にすることのできた者が、その妻にして女王となることを約束した’」。なかんずく、マルコの謙虚な散文を水膨れした複雑な語りで威厳をもたせるいかなる機会も見逃しはしない。例えばマルコが、セイロン王の素晴らしいルビーを手に入れようとして無駄に終わったグラン・カンの努力を語って、

単に王が「先祖のものだということだったから」と断ったと述べているのに対して、この改作者は使節たちに対する王の気高い返答を延々と記している。キリスト教徒ナヤンの敗北後キリスト教徒を励ますクビライの言葉はまさに、「おお、汝らの判定はどうじゃ……」に始まる一場の演説となっている。山を動かし給うよう神に祈るバグダードの靴屋の祈り、妻が他人に身を任すことを禁ずるお触れを撤回してもらうためのカムルの民の皇帝への使節行、ドル王の残酷な罪滅ぼしの後のウンカンとの対話、これらは翻案者にその苛立たしい雄弁を遠慮なく吐露させる絶好の機会となる。タルタル人の力の優位についての要約的な覚え書きの中でマルコが、ある時自分が無数の人々の主になっているのを見たチングスカンはさらに広範な征服を思いついた、と述べているくんだりで、「世界の大部分を征服したいものだ」と彼は言った」とある。ここで *dit*＜言った＞はもちろん *penso*＜思った＞、*disse in cuor suo*＜自分の心の中で言った＞の意味である。ところがこの翻訳者はそれに具体的な意味を与え、「重臣たち」に囲まれ「華々しい演説でもって」彼らに語りかける征服者を描き出さずにはおかない：

「親愛なる友人に兄弟たちよ、御覧のとおり、我々かくも多くの勇壮この上なき者たちが、このような何一つない未開の地に集まっておる。その徳の高さと心の寛さには、余の判ずるところ世界とてもようよう足りるほどであろうに。だとすれば、我々に臣従する国民を支配し、かくも素晴らしき力と強さと数を有する我々皆にとって、かくも心寛き人間ではなくただ野獣が棲むにふさわしい地に閉じ込められておるというのは、大いなる屈辱ではあるまいか。汝らの主にして隊長として余は、この我らの住まいを大いなる恥辱と見なすあまり、眼を上げて汝ら勇壮この上なき騎士殿方を正視することとてようせぬわ。その徳と優秀さは、もう長い間汝らの勇ましい武器を他の村やこの未開の地で野獣に対してよりは、もっと気高い戦いに試したであろうことを余は知っておる。今まで余の中にのろさが欠けていたのは分かっておる。しかしこれからはきっと余も汝らと等しく、心を一つにしてこの未開の地から出てゆこう。じゃによって親愛なる兄弟たちよ、皆一緒に力を合わせ、我々の徳にふさわしい住まいを獲得しに行こうではないか。時間も無駄にしないでおう、今まであまりにも失ったのだから」。この限りなく優れた王にして隊長の華々しい演説を聴いて、高貴の騎士たちは皆声を一つ

にして叫んだ、「主よ、そなたの心寛き命令の実現されますことを、さあ我らは皆ここに、必要とあらばそなたの支配の拡大と名声のため、死ぬる用意ができております。ですからどうぞ、我らが王にして隊長よ、命じて下され、時を失わぬようしましょうぞ、そなたは皆から臣従されているのですから」。

空虚な言辞と誇張へのこの危険な傾向からして、きっかけさえあればこの無名氏が、マルコの本物の記事ではなく自分のとんでもない思い付きの何かをどこで付け加えるか想像するのは容易である。例えばマルコが、いかにタルタル人が死亡した二人の若者の見せかけの結婚を行い、その偽りの上に実際の親戚関係を結ぶか語っているところ(LXX 80-91)は、次のようになっている：

「この人々は次のような残酷な風習をもっている。もしある市民の七歳を過ぎた若い息子が死亡すると、その父はすぐに死んだ息子と同じくらいの年齢の娘を探させ、その生きている娘と死んだ男の子の結婚を取り結ぶ。そしてこの結婚の契約書を作成し、双方の親族が非常な歓びの内にこの哀れな娘を火の中に入れて焼き、次のように言う：煙よ、上れ。この結婚があなで幸せなものとなるよう、神々に祈ろう、と。かの哀れな娘が燃え尽きると、親族皆で盛大なお祝いをして大宴会を催す。そして一つは若者、もう一つは娘の二つの像を作り、それを二つともできるかぎり豪華に飾った一台の車の上に載せる。その車を馬に曳かせ、お祝いと遊び事をしながらこれら二つの像をあらゆるところに連れ回す。次に火のところに持って行き、その二つの像を燃やして、この結婚をあなでも幸福なものにして下さいと、神々に大いに祈り願う。こうしてその日以降、皆堅い親戚関係を共に保つのである」。

こうした調子全般の不忠実さのほか、まさしく解釈が忠実でないところは VB には無数にある。最も無意味なものの中からいくつか引用しよう：

XXIII 19-21「峠の狭さのためタルタル人は、サン・ベルナルドという尼僧院までを除いて侵入することも支配することもできなかった」 XXX 2「トリス [タブリーズ] は大きくて立派な市で、その言葉でイラクと呼ばれる」 LXX 66-72「誰か盗んだことが見つかり、盗んだ物が一つだと 7つの棒打ちが加えられる。二つ盗むと 17の棒打ちをくらう。三つだと 27。このようにして盗んだ物一つ毎に 10の棒打ちが加えられ、107まで達する。そのため打たれて死

ぬ者もいる。もし誰かが 107 の棒打ちを越える 15 頭の牛を盗むと、その頭をはねる」 LXXIV 22-4「この町はすでに述べたごとくゴグ・マゴグと呼ばれるが、それはそこに 2 種類の人々が住んでいるからで、一つはウング、もう一つはムングルといい、彼らはタルタル人と一緒に暮らしている」 同 58-9「こうした類の妖術師は、驚くほど数多い」 CVII 11-2「僧侶たちのいる寺院が数多くあるが、彼らは商売で暮らしている」 CXIX 16「海の中にあり、また首飾りにする白いコヤス貝」 CXXV 9-12「遠くから多数の商人が銀を持って金買いに来る。金を村の外に持ち出すことは住民全てに禁じられているが、彼らはよその商人が銀や他の商品を持ち来たって村にとっていいことをするように、それを買いに來ることを望む」 CXXVII 3「そこ〔ベンガル地方〕は、私ことマルコ・ポッロがグラン・カンの宮廷にいたとき、彼によって征服された」 同 6-7「学校（確実に *esculles*＜官宦＞が *escolles*＜学校＞と読まれたため）を開いている師がおり、妖術と偶像崇拜を教え、この教義は皆つまり貴人や諸侯の間にもとても広まっている」 CLXI 33-4「勇敢な人物だったもう一人の者を彼〔グラン・カン〕は、多くのタルタル人が死んだその島〔カラフト〕に流罪にし、彼はそこで生涯を終えた」 CLXII 2-3「これら島民〔ジパング人〕は皆偶像崇拜の徒だが、カタオやマンジの偶像崇拜の派や教団のではない」 CLXXV 117-9「夫を焼き、妻は夫と一緒にあの世の生に行きたいと言いつつ火の中に身を投げる」 CLXXX 13-4「この〔カイルの〕王は 300 人の妻をもち、彼女らを誉れ高く遇している」 CXCIII 4「背が高く太っているからまるで巨人のようだが、いかにたくましく力強いといえどもこれほど多くの人間を運べるほどたくましく力強くはないであろう」〔以下略〕

こうした類の翻訳者が抱かさずにはおかない余りにも当然の不信感にもかかわらず、VB は我々の注目に値する。少なくとも二つの箇所、F になく Z に保存されている独自の記事を含んでいる (pp.159-60,175)。したがって他のところでも、勝手な拡大や明らかな大間違いや大胆な書き換えの傍らに、何らかの純粹で独自なものが保存されているかもしれない⁴³⁾。私の版では、然るべき留保をもってながらも、その短さと相対的な無意味さの中にも、それらが本物の起源の保証のようなものを備えているかに私には思えるもの（この改作者は不注意に要約するか、しつこく執着する）、ならび

に何か別のテキストに反響のようなものが見い出されるごくわずかのもの (pp. 173,207) を注記した。

この版からラムージオは、慎重さを欠く信頼でもって広く採り入れた。我々は、記録を完全なものにするために我々の版に転記したいくつかのごく小さな新点 (pp. 173, 175, 176, 178, 181-2, 204-5, 207, 208-9, 212-3) の他に、VB をしてポーロのテキストの中でおそらく最悪のものとしている明らかに誤っており書き加えられたあまりにも多くの他のことも、それ独自のものとして再録した⁴⁴⁾。

6 ラムージオについての総合的判断

以上 Z・Z¹・V・L・VB、つまりラムージオが用いた諸版をめぐって行ってきたこれらの議論から、かのヴェネツィアの編者のかくも論議されてきた作品についての総合的な評価に移ることが可能となる。

ギジ手稿のような他に優れた重要性を有する稿本の直接的かつ体系的検討、それがマルコのオリジナルの上に直接作成されたものだという確信、それと自分が目の前にしていた他の諸版との深い異なり、これらはラムージオにそれら他の版に対する何らかの不信を芽生えさせ、自分の版の基礎として、自筆稿により近いと考えられ、正確さと広範さではっきりと他のどれよりも優れているテキストを採用することの必要性を感じさせたに違いない。彼がマルコの‘真の’書を全体的かつ純粋な形で提供すると約束しているのでは全くないこと、ピピーノ修道士によって与えられた骨組みに自分の知っている他のテキストから採った断片を織り込むことによって、すでに出版されているものより優れた版を提供すると申し出ているにすぎないこと、を確認せねばならない。ところが、それら補助的典拠の価値の異なりに対する無知と、それらを用いるにあたって正確さと徹底さを欠いたことが、基盤としてピピーノを採用したことによってすでに最初から危険にさらされていたこともあって、その仕事の誠実さと有益さを損なう結果をきたした。

底本としての P の選択は、当然ながら様々なやっかいな結果をもたらさずにはおかなかった。残念なことに、P に典型的な大きな欠落の大部分が R でも見られ、我々の章の 21-22, 137-139 (13), 200-217, 221-224 が欠けている。P あるいは P が属する家族に特有

の誤りと恣意がみられる。例えば、ニコロとマッテオは「ヴェネツィアから連れて行った多くのキリスト教徒の従者を伴って」グラン・カンの宮廷へと向けて旅立つ。グラン・カンはよく彼らを自分のもとに呼び寄せ、「彼らはその面前で大いに感謝された」。クビライは、「彼らを教皇への使者として送りたいものと心中考え、そのことについてまず諸侯の助言を得ようと望んだ」。また彼はイエス・キリストに「このうえなく献身しており、それを真の神とみなして、至高の崇敬を捧げていた」。コガタルが重い病にかかったので、二人の兄弟は「彼の望みと多くの者の助言によって」、彼をそこに残した。ニコロがヴェネツィアに帰ってみると妻は死亡しており、「彼の出発後に一人の息子を生んでいた」。サン・レオナルドの修道僧たちの奇跡の湖は、「ジェルケラット Geluchelat」と呼ばれる。山の老人の天国には、「金糸絹糸の着物をいとも巧みにまとった乙女たちが絶えずそぞろ歩いているのが見られた」し、その宮殿で彼は「毎日このマコメットの庭園について説き聞かせていた」。サプルガンのメロンは、「ウリに対してするように帯状にぐるぐるとすっきり」剥く。ロプの砂漠を横断するにあたって旅人は、「沢山の頑丈なロバとラクダに食糧と商品を背負わせ、そこを横断し終える前に、そのロバとラクダを殺して食べる、しかし多くの荷を運び食べ物は少なくてすむから、たいていはラクダを連れて行く」。ロカックの村には、「レモンのような大きさの *berci*＜ブラジルスオウ＞」が家で取れる。「とても柔らかな皮をした、我々のところでクロテンと呼ばれる小さな」動物は、タルタル人からは「*rondes*＜ロンデス＞」と呼ばれる、等々。

すでに指摘したごとく、VB を用いたときのラムージョの無批判的な楽観主義は、さらに嘆くべき結果をもたらした。あの途方もない書き換えの子供っぽい曖昧な修辞が、彼を驚かさなかったというのは奇妙である。彼が用いたコピーというのが、前に見たごとく彼の個人的所有になるものであったに違いないということが、おそらくその欠点を覆い隠し、その使用を安易にする役割を果たしたのであろう。彼によって採用されている固有名詞のいくつかの異形——*Guielmo da Tripoli*＜グィエルモ・ダ・トリポリ＞、*Lucansor*＜ルカンソル＞、*Accambale*＜アッカムバーレ＞——これらはそれに対する彼の全幅の信頼を示すに充分であろう。が、さらに重大な証拠がある。かのヴェネツィアのテキストが原文を誤解しているところで、彼は余りにもそれに頼っており、例えば、次のような明らかに

マルコの考えに忠実でないRの箇所は、単なるその翻訳である(cod. Dona delle Roseの葉番号とフィレンツェ版Rのページを示す)：

f.242r-p.122「彼ら〔タルタル人〕は *crudelissimi*＜冷酷極まりなく＞あらゆる困難に耐える」(Fに「彼らは世界で最も困難に耐える *celles* 人々である」とある箇所の *celles*＜その＞を、VBかその典拠が *cruelles*＜冷酷な＞と読んだと考えぬ限り説明のつかない誤りである。) f.243r-p.132「位の高い^{4 5)} 女性も同じく髪以外全く毛がなく、美しい肌は色白く、四肢は全て形良い、*ma molto lussuriose*＜が、とても淫蕩である＞」 f.251v-p.260「ナデシコのような白く小さな花をつけ、*e quando sono maturi sono negri e foschi*＜熟れると黒くくすんだ色になる＞」 f.251v-p.263「白いコヤス貝をお金の代わりに使うのだが、それは海中にあり、*e ne pongono anco al collo per ornamento*＜首に巻き付けて飾りにもする＞」 f.252v-p.271「もう一方の者と何かしなければならないときには、主たる方が板を手にとって二つに割り、*segnano sopra quello quanto hanno da fare insieme* ＜その上に共同でしなければならないことを記し＞、我々が割符でするようにそれぞれその片方を所有する」 f.254r-p.281「住民はその黄金を村の外に持ち出すことは許されていないが、商人が彼らの生活に必要なものを携えてやってきて、その黄金を銀と交換することを望む」 f.254r-p.285「その人々は……学校を開き偶像崇拜とお祈りを教える先生を擁しており、その教養はこの地方の紳士と諸侯皆にあまねく広まっている」^{4 6)} f.261r-p.348「とても細かな青色顔料で顔に色を塗る」 f.263v-p.367「このジパング島と近隣の島々では偶像はどれも違った形に造られている」 f.274r-p.448「*quelli che servono agl'idoli ne'tempi*＜寺院の中で偶像に奉仕するのは＞この世で最も残酷で不実な者たちだ、と私は聞いた」^{4 7)}。

文体上の対応の文字どおりさは、ラムージョがこのヴェネツィア人改作者の空想上の展開に足を止めてしまったときのうかつな興味を疑いないものとしている。引用は部分的に済ますが、以下の対応からうかがえる話し全体を対照されたい：

XXVII 1sgg.:VB 232r「そのカリフの命令を聞くやキリスト教徒は、彼の残酷な性質とただ自分たちの財産を奪うためにそうするのだということを知っていたので、嘆き悲しんだ。……そしてすぐその靴屋を探し出す仕事に取り掛かった。……彼はとても敬虔な暮ら

しと唯一の信仰を守る清らかな男で、ある時彼のところに一人の女性が靴を買いにやってきたのだが、試しに履こうとしてこの親方に足を見せたおり、その女性が裾をたくし上げたので、親方には脚が見えてしまった。その美しさのあまり、親方は良からぬ想いにとらわれたが、すぐいつもの徳性に戻り、その女性を店の外に送り出し、福音書に、汝の眼悪しき行いをなさばそれを取り去るがよい、両の眼で地獄に行かんよりは、片の眼で天国に行く方がよければなり、と書いてあることを思い出して、女性の脚を見るという破廉恥な行いをしたことを悔やんで、店で使っていた錐の一本をやにわに手に取り、それでもって顔の眼を潰した」・R 37「その言葉を聞いたときキリスト教徒は、彼の残酷な性質とただ自分たちの財産を奪うためにそうするのだということを知っていたので、殺されるのではないかと大いに心配した……。その靴屋を呼びにやり……。正しい暮らしの……。清らかで信心深い男・・その彼に次のようなことが起こった。とある美しい若い娘が一足の靴を買いに彼のところに来、それを試そうとして手足をさらし、裾をたくし上げたがためその脚が見え、その美しさに彼は良からぬ想いに心を乱された。しかしすぐ我に帰り、娘を送り出し、福音書に次のようにある言葉を思い出した：「汝の目、汝に過ちを犯させるならば、それをえぐり出し、捨て去るがよい、両の眼をもって地獄に行かんよりは、片の眼をもって天国に行く方がよければなり」。直ちに彼は、店で使っていた錐の一本で右の目をえぐり出した」[以下略]

もちろん、R が VB から写した新記事は全て絶対確実に恣意的な追加か全くの敷衍であると断定することはできない……。いくつかは、すでに述べたごとく疑わしいながらも我々のテクストに註記されている……。しかしかの改作の全体的調子からして、それがポーロのものであると肯定して用いることにおいて我々は極度に慎重であらねばならない。

ラムージョ版の堅固さは、P と VB がその中で果たした過剰な役割によって揺るがされているだけではない⁴⁸⁾。残念ながら、確実にラムージョ自身に帰せられる希とはいえない追加、訳者としての不忠実さ⁴⁹⁾、由来が異なり時として意味の一致しない要素を一緒にくたにし芸術的に修正するときの過度の自由さ、これらがその価値を減じている。我々はラムージョを、確実にその作品の残りよりも劣る最初の数ページの訳や、それぞれの原文とあれほどかけ離れて

いる冒頭の二つの序文から判断してはならない。しかしそこには疑いもなく慌ただしい編纂者ならびに修辭家としての知性が表れており、作品の内容の厳しさと具体的な性質によってその後は少し抑えられてはいるが、決してすっかり乗り越えられてはいない。この教養高いユマニスト、十人委員会の名高い秘書がかの著名な同市人の帰国を愛国的に劇的なものにしたときの根拠のない正確さは、この最初の方の文学的態度に帰されるべきものである：

「ニコロ、マッフィオ、マルコ殿は、この宮廷に何年もあり、高価な宝石や黄金で大金持ちになったが、心中もう一度祖国を見たいとの熱烈な思いがいつも消えることはなく、たとえいかに名誉を授けられ厚遇されていようと、それでもこのこと以外他には考えなかった。そしてグラン・カンがとても歳老いたのを見て、もし彼が自分たちの出立前に亡くなれば、旅の長さで襲いかかる無数の危険からして、家に戻ることはまずかなわぬだろうと危ぶみ、彼の生きている間にそうできればと願っていた。そこである日ニコロ殿は、グラン・カンの機嫌のととてもいい折りを見計らって跪き、三人の名で出発の許しを願い出た。この言葉にグラン・カンはいたく心を乱し、一体いかなる理由で、いともたやすく死ぬかもしれないかくも長く危険な旅に出たいという気になったのか、と言った。そして、品物あるいはその他の理由でなら、彼らがいま家に有しているものの倍を授け、彼らの望むいかなる名誉でも加えてやろうとなさり、彼らにかけている大きな愛情ゆえにその出発をきっぱりと拒絶したのであった」。

これらの具体的事実のどれ一つとしてマルコの簡潔な話(XVIII 3-7)の中には見い出されないし、ここでラムージョは、彼自身が序文の書簡の中に収録したポーロたちの帰還の民衆的伝統を反映させる一方、Vのいくつかの根拠のない事実を真面目に受け取って発展させている。ラムージョの序文の中でのみ出会う細かな情報全て…道中マルコは聞いたこと見たこと全てをメモしていたこと、グラン・カンが出発に当たってポーロたちにキリスト教徒の地での滞在は短く切り上げてすぐにも自分の下に帰ってくるよう約束させたこと、グラン・カンがこの世からいなくなったと道中知ってオリエントに戻れるとの希望はポーロたちにはなくなったこと…これら他のテキストにはない独自性はすべて、全く客観的根拠を欠くものであり、この編者が自分の仕事を始めたときの単に視覚的な修辭を証

言するものであると我々は考える。その痕跡は、確実にラムージョの手になるものであり往々にして物語的に誇張されているあの章題や、言葉遣いの知識ぶった重々しさや、どうしてもマルコの手をより合理的でより優雅なものにしたいとの危険な幻想の中に残っている。彼の版の多くの誤りは、実際には不幸な訂正である。あまりにもラムージョは、かの大旅行家の人となりに書斎の慎重な文学者程度の小人物をもって替え、次のごとき原本に一切なく話の調子を深く偽らす用心深い決まり文句を乱用することによって、自分が書き写していることに信を置いていないことを浮かび上がらせている：
gli fu detto <と彼に語られた> (pp.73,81,85) , mi fu detto<と私に語られた> (pp.28,448) , a mio giudizio<私の判断では> (p.62) , gli fu affermato per miracolo<奇跡だと彼に断言された> (p.81) , e opinion d'alcuni<ある人たちの意見であるが> (p.110) , dicono per cosa manifesta<明らかなことだと彼らは言う> (p.93) , conciosiacosa che mi fosse detto<私に述べられたけれども> (p.403) 等々である。いかなる大きな書き換えよりも害があり嫌悪すべきものであるが、もって廻った和らかな言い換えはほぼ至るところで出会う。マルコが単に犬のことを言っているところ (CCXVIII 26-7, 36) を、ラムージョは「犬に似た、ほとんど犬と呼んでもよい一種の動物」と訂正する。マルコが「ここはいつでも暗い」と言っている (CCXIX 3) のを、ラムージョは「‘冬の月の大部分’太陽は現れない」と明確にする。VBで LXII 14 が、「彼らは我々がもっているような暦と月をもっている」と訳されていると、ラムージョは「彼らは我々がもっているのと‘ほとんど’同じような月の暦をもっている」と、例の慎重さでもってこの大間違いを繰り返す。

ラムージョ版を再版することによってマルコの真の書を提供できると考えた者たちは、-- その発言が十分に証明しているように -- もちろんひどく裏切られた。ラムージョのテキストは、真摯なポーロの版の底本として用いることはできない。しかしながら、我々が挙げてきた欠点が R と Z・V・L のグループとの関係を忘れさせるようなことがあってはならないし、我々がこれら三つの貴重極まりない典拠に下した評価と感謝の念のこもった判断が部分的には R にも当てはめられるべきことも同様である。さらにはまた R が、R だけが、もちろんその同じグループの一稿本から由来した重要な事項

の顕著な一群を有していること、そしてそれらはその信頼性と興味深さにおいていずれにせよ Z およびそれに近い稿本によって証されているものに劣らぬものであることを忘れてはならない。F に先立つより豊かなテキストの復元にとっては、まさに本質的な一つの典拠である。50

また F は、次のさもなくば意味不明ないくつかの箇所の修復を、彼のみに負っている：XCIV 88, CXIV 9, CLIII 77。

7 ヤコポ・ダックイの「ほとんど信じ難い事ども」(I)

アンブロジャーナ図書館写本 ms. D526、修道士イアコポ・ダックイ Jacopo d'Acqui の『世界像あるいは年代記』*Imago mundi seu Chronica* の 1300 年代のコピーは、cc. LXXVIIId-LXXIXd にマルコのいくつかの抜粋 [I] を含んでいる：「ヴェネツィア人マルクス殿はその書の中で世界の大きいなる驚異とタルタル人について語っているが、そこから抜粋してほとんど信じ難い事どもが見られるよう要約した」⁵¹⁾。アンブロジャーナ写本に極めて近い稿本に基づいて 1428 年に作られトリヴルツィアーノ写本 ms. trivulziano 704 に保存されている、同じ作品の一コピーも cc. CLXXXVIIr-CLXXXIIr に同じ箇所を含んでいる⁵²⁾。これに対して『年代記』のよく知られた他の二つのコピー、トリーノ国立図書館 ms. G II 34 と ms. J II 22 には欠けている。それらにはないということは、この作品の構成と現存稿本間の実際の関係が明確でないことと相まって、問題の「抜粋」が誰か写字生の追加であるかもしれない可能性を考えさす。修道士イアコポがその著者であるなら、14 世紀の 40 年代に属する蓋然性が極めて高い⁵³⁾。

この抜粋の前に、おそらくきつとそれに関連してであろう、この年代記作者が作品の最後のところに並べている沢山の記事の一つ、ライアス沖でのヴェネツィア人とジェノヴァ人の間の衝突、が置かれている。あまり重要でない何か別の交戦を 1294 年のその名高い戦いと混同しているが、彼はその捕虜の中にかの大旅行家を数えている。以下にこの年代記者によるよく知られた一文を再録するが、トリヴルツィアーノ写本の異読のうち意味あるものを括弧の中にイタリック体で記す：

「イエスス・クリストゥスの 1296 年、すぐ上に述べた教皇ボニ

ファキウス 6 世の御世、アルミニア（アルマニア *armania*）の海、ライアス（ラ・グラザ *La glaza*）と呼ばれるところ（市）で、ジェノヴァ商人のガレー船 15 隻〔と〕ヴェネツィア商人の 25 隻の間で戦いがあった。大合戦の末、ヴェネツィア人のガレー船は壊滅し、全員（一部は）殺されたり（一部は）捕らえられたりする。その中に、それら商人たちと共にいたヴェネツィア（ヴェネト）人マルクス殿も捕らえられる。彼はミッロヌス *Millonus*〔百万〕と呼ばれる（ミリオヌス *Milionus* と呼ばれていた）が、それは千の千倍リブラの富に値するからで、ヴェネツィア人の中ではかく呼ばれて（称されて）いる。そのヴェネツィア人マルクス・ミロヌス殿は、他のヴェネツィア人捕虜とともにジェノヴァの獄に引き立てられ（連れてゆかれ）、長くそこにある（あった）。このマルクス殿は父・叔父とともに長くタルタリアにあり、そこで多くのものを見、金持ちになり、かつまた有能な人間だったから多くのこと（多く）を学び知った。それで、ジェノヴァの獄にあったおり、世界の大なる驚異について、つまり自分の見たことについて一書をものする（した）。彼の語っている（書いた）ことは見たことより少ない、それというのは、すぐに他人を嘘つき呼ばわりし、自分が信じたくないことや知りたくないことは理由もなく嘘と決めつける悪口屋たちのおしゃべりのためである。かの書は、世界の驚異に関するミリオン *million*（ミロン *milon*）の書と呼ばれる。そこには、最も大なるほとんど信じ難いことどもが沢山書かれてあるため、死に際に（T:ナシ）友人たちから、その書を訂正し、そこに書いた度を越したことを取り消すよう求められた。彼は、「私は見たことの半分も書かなかった」と答えた。死に際してそう言ったのであれば、彼の書いたことはなおさら信用に値する。そのうち度を越したことや余りにも長たらしいところは端折り、以下に（他の部分が引用されるよう）要約して引用しよう」

ここに収録されている言い伝えは——最後のところはピピーノが序文で伝えているものに呼応しているが——ヴェネツィアでついその前まで口にされていたことなのかも知れない。古文書庫の記録によって確認される落ち着いた払った断言 *sic vocatur in Venetiis* <ヴェネツィア人の中ではかく呼ばれている>に注意されたい。その時までにまだ決定的には消え去っていなかったこれほど多くの貴重な情報——マルコがその不幸な戦いに加わったときの *mercator*<商

人＞という資格、オリエントへの戦いの場所の設定、投獄の長さ、同書の最も珍しい新記事に対する意地悪たちの懷疑——これらの情報をイアコポに提供した者自身が、著しい完成度を備えた *Liber Milionis*『百万の書』の一本を彼に伝えたのかも知れない。というのも、上に引用した箇所が続く 21 章ははっきりと二つの部分に分かれ、最初の 9 章はこの冒頭の記事に対応して「ほとんど信じ難いことども」を含み、今に伝わるものより豊かな一テキストの反映であること、それに何らかの概略的な要点を記したものかおぼろげな記憶に基づく編纂であることを、同時に示しているからである。最後の 12 章はこれに対してはっきりとある版 (LB) [ヴェネト語版のラテン語訳] の、ゆるやかな発展はあるが、規則的な順序正しい転記である。そしてそれらと最初の 9 章は、私の見るところ何の関係もない。もしこれら後半の 12 章が別の写字生によって付け加えられたのでなければ、イアコポは前に引用した文章とそれと論理的に再び結びつく前半の章において、自分がマルコについてどのようにして最初のひらめきを得たかを述べているのだと推測することができる。仕事がもうずっと進んでからの遅ればせながらのひらめきで、もちろん要約的である。なぜなら『年代記』の残りの部分では、この *liber pulcherrimus*＜とても素晴らしい書＞は出てこないか、あるいは哀れな間違いとともにうろ覚えに利用されているからである。54 次の段階でマルコのある稿本——最初に検討されたのと別のもの——が、彼のいつもながらの典拠の小グループに加わり、イアコポは、ブッチと同じように、それを全部自分の覚え書きの中に書き写すという企てを温めていたのかも知れない。その転記は、我々には分からぬ何らかの理由でわずか 12 章で止まってしまったのであろう。

イアコポが、マルコの語る最も奇妙な事がらをなんら明確な順序もなく、さながら思いつくままに再現している章はしかし、極めて注目すべき興味を備えている⁵⁵⁾；15*)

I. 黄金を持つか手にしたタルタリア人は誰であれ、それをすぐタルタリア人の主であるグラン・カーンの宝物管理人のところに持って行くと、黄金と交換にその量と価値その他に応じて欲しいものをすぐにもらえると言う。で今や、その黄金は様々な所や町で莫大な量になり、全イタリアの他の山から分かれた全ての山よりも多いと言われる。また銀それに宝石や貴金属のような他の貴重品につい

ては、その量も数も重さも、生きている者には誰一人評価することはできない。当たり前だが、絶えず増えるから貯まっているのが減ることは決してない。

II. 東方のグラン・カンの宮廷では、ある時は小さなある時は大きな様々な娯楽が行われる。もっとも、小さいと言ってもそこでは決して小さくはない（そこでは小さいと言っても、我々のところでは最大である）。大きな娯楽では、彼は貴族たちと馬に乗り、集団での娯楽となるとほとんどいつも約 15 万（10 万か 5 万）人の貴族が馬に乗っているのが見られ、彼らは皆金箔を張ったデリュコルの服を着ている。しかも従者は除いてであり、彼らの数はしばしばその 3 倍に達する。それで、威厳ある人間にみられる。

III. グラン・カーンは莫大な数の狩人を有しており、彼らは毎日獅子、熊、野牛、驢馬、馬などの狩に行くこと以外何もしない。というのもそこには無数の動物がおり、多数の者が家畜や野獣の皮（と肉）の仕事をするからである。この狩人たちは呼び子と鷹を連れ、犬を無数に持っている。実に 10 万の人間が馬に乗って毎日狩に出かける。また獲物は全てグラン・カーンの宮廷に持って行く。肉を持って行けなければ、皮を持って行く。このように彼らは、驚くべきあらゆる野獣あふれる広大な山野を有しているのである。

IV. ミリオンの書の中に、東方のある所にはとても太い葦〔竹〕があると書いてある。その太さは、中の穴に達するまでに 1 キュービットある。商人たちはその葦を取って荷車の上に積む。また彼らは火を携えており、その上に葦を置いて熱くし、焚き付ける。充分熱せられるとすぐ割れる。そうすると、3、4 マイル先まで音がする。すると、獅子や熊のような害獣は驚いて逃げ、道から遠ざかって行く。〔その時〕商人は道を通る。でないと、彼らは獣のためその地をあえて通ろうとしない。

V. ミリオンの書はまた、東方と南方のある所では女も男も 4 歳になるまで皆裸でいると言う。また女たちは処女でなくなると腹の前に何か小さな魔除けをつけるが、男たちは大抵いつも何もつけない。

VI. 太陽の下にあるインドとその彼方では、女は処女だと結婚できないと言われる。ところが、より多くの男を持っているほどいい結婚ができる。その女はとても美しいと見なされるからである。女と寝た者は誰であれ行なったことの証拠として、彼女を保有したという何らかの印〔を与える〕。そうした男たちの誰かから妊娠すれば、

その女を妻に娶った者によって養われ、生まれてくる他の者と共に家の相続人となる。

VII. また別の所では、女は動物が全てそうであるように共有で、誰でも欲しい者が取り、好きなときに別れると言う。もし息子か娘が生まれると母親が面倒を見、父親は何も世話しない。男が女を保有している間、女は男の費用を全て負担し絶えず働く。一方男たちは娯楽にふける。

VIII. 野蛮人たちのある所には次のような風習がある。男が妻を娶ると、女が供えものをその神に奉納するよう、司祭のもとに連れて行く。奉納の後、司祭は女を自分の部屋に導き入れる（そして彼女と肉の繋がりを持つ）。そしてその女を体験した後、その夫に返す。こうしてその時女は神聖なものになったと言われる。どの地にも多くの司祭がおり、ほとんどどの教区にも任命されている。しかし処女でなければ、女は司祭に与えられることはない。

IX. 野蛮人たちのある土地には次のような風習がある。男は多くの妻をつまり欲しいだけ娶る。彼女たちはそれぞれ他の女から離れており、つまり皆自分のところにいる。彼女たちの間では主人の共同妻と呼ばれる。それぞれできるかぎり自分の家族を持ち、皆働き、またできるかぎり男をあらゆるもので飾り、よりよく尽くした者が彼から愛される。男は今日はある女、明日は別の女と過ごす。こうして絶えず皆の間を回り、食事し、寝る。たまたま病気になると、病気になったその家で自由になり、そこに滞まる。男が死亡すると、その男を一番愛していた女と一緒に生き埋めにされる。そのこと〔に〕女は最大の歓びを得る。あの世では自分一人がその妻となるからである。皆大きな碑を持ち、人によってその碑に大きな飾りをつける。

これら 9 章のうち最初の 4 章は、心理的好奇心の価値があるだけである。そこでは、マルコの書が伝説の領域でおめでたい空想の上に生み出した大きな効果が表現されている。我々がそれら誇大な数字の具体的典拠を探すとしたら、同じようにおめでたいことであろう。しかし、残りの章も同じように考えることができるだろうか。他所人の偶然の子供は嫡出子と同等であるという、第 6 章の記事の中にイェコポの純粋な考察を疑うのはおそらく正しいであろう。しかし他の次のごとき独自の記事は、今日知られているポーロのテキストのどれかの単なる反映に帰すことはできない。すなわち、処女

性の特徴としての全裸について、母系制について、聖職者の *ius primae noctis*＜初夜権＞について、多妻制について、墓の華美についてである。かのマルコが誰か他の東方習俗の語り手と混同されたのだろうか。そう断定できる要素は私の脳裏に浮かんでこない。一方また、細心を極める宗教的配慮と教会による厳しい検閲の時代にあって、もしポーロのテキストから何かが抜け落ちなければならなかったとすれば、きっとそれは今問題にしているような型の記事であろうと認めざるを得ないであろう。こうした内容は、それが他の写本にないことが我々を驚かすことからして、これらの章を――とりわけ第 8 章にとって――削られる危険に余りにもさらしていたのである。

したがって我々の研究の現段階では、これらが単なる追加かそれとも、さらに後の何らかの変形をとまなっているにせよ、純粹にポーロの記事かを確定することはできない。もっとも、この二番目の仮定の方が正しくても、かの断片が余りにも短いことと地理的データを一切欠いていることからして、ポーロの物語のどこに挿入してしかるべきか定めることはできない。

今し方検討した箇所続く 12 章は、その全体性と規則的な順序からして典拠について疑いの余地はなく、LB の良好でない一本を反映している。同じ俗語が残っていること (*turris del ferro*＜鉄の塔＞、*baldacho*＜バグダード＞、*calipho*＜カリフ＞) や、*aguglia*＜タカ＞を *acus*＜針＞と訳す同じ間違い (cfr. F XXIII 4) が見られることからして、LB が由来するのと同じの原本から独立した反映ではあり得ない。I のいくつかの曖昧さは、すでにラテン語テキストの崩れを想定さす。LB には *modo sunt debiles et viles et magni potatores effecti*＜今では弱虫で卑怯で‘大酒飲みになってしまった’＞とあるにもかかわらず、I が *modo facti sunt multum viles et dant se ipsos multis peccatis*＜今ではひどい卑怯者となり‘多くの罪にふけている’＞と書くことができるには、*potatores*＜酒飲み＞と *peccatores*＜罪人＞の混同を必要とするからである。また I のバカげた文 *habent unum patriarcham qui in lingua sua dicitur Jathelich qui adhorant inter eos archiepiscopos episcopos abbates etc.*＜その言葉でヤテリックと呼ばれる一人の総大司教をもっており、彼らの間で大司教・司教・修道院長を‘崇拜する’云々＞を説明するには、LB の読みで十分だからである：*hii habent unum*

patriarcham nomine Jathoric qui ordinat archiepiscopos episcopos abbates etc.<彼らは、大司教・司教・修道院長を‘任命する’ヤトリックと呼ばれる一人の総大司教を有している、云々>。文体は根底において同一であり、それを証明するにはわずかの例でこと足りる（LB・Iの順で引用する）^{11*)}：

XX 3-5:In ipso regno sunt multe civitates et castra que habundant in omnibus et sunt loca magnis solatiis deputata -- In isto regno arminie minoris sunt multe civitates et castra que habundant in omnibus bonis et sunt loca deputata maximis solaciis.「この小アルメニアの領土には都市と城市が沢山あり、それらはあらゆる良きものに豊かで、最大の娯楽の地と見なされている」 XXII 7-10:In partibus illis moratur tempore estivo exercitus tartarii orientalis quare ibi reperiuntur optima pascua pro animalibus suis. In yeme autem propter nimiam frigiditatem nivium non poterant ibi cum suis bestiis vivere sed ibant ad loca calida -- In partibus illis moratur tempore estivo exercitus tartari orientalis quia ibi sunt pro animalibus optima pascua. In yeme autem, propter nimiam frigiditatem nivium que cadunt ibi magne, non stant, sed cum bestiis suis vadunt ad loca calida quia aliter non possent vivere.「その地域は、夏期には彼らの動物にとって最良の牧草があるから、東タルタル人の軍隊はそこで駐屯する。一方冬は、そこに大量に降る雪のひどい寒さのため彼らはそこに留まらず、でないと暮らせないから家畜とともに暖かい所に行く」 XXII 18-9:Hic liquor non est bonus pro comestione, sed pro combustione est utilis valde et pro unctione camelorum propter scabiem et alias infirmitates eorum -- Illud non est bonum ad comendendum, sed solum ad comburendum et pro unctione camelorum, scilicet quando habent scabiem quia tunc illa unctione liberantur; valet etiam ad alias diversas infirmitates.「その液体〔石油〕は食用には適さず燃料になるだけだが、ラクダのための塗り薬としても良く、疥癬ができるとそれを塗ると治る。また他の色々な病気にも効く」 XXIII 27-30:Iuxta illud (sic) lacum est unus golfus maris quod vocatur mare de Geluchelan quod circuit bene per secentem miliaria et distas ab omni mare bene per XII dietas. In eum intrat Eufrates, quidam de quatuor

fluminibus paradisi et multa alia flumina -- Item in alia parte lacus est unus gulphus maris salsi, quod vocatur mare de gelutheran, et circuit quasi trecenta miliaria, et distat ab omni alio mare per XII dietas, et in isto mare intrat eufrathes vel nillus qui est unus de IV fluminibus paradissi, ut dicitur in scriptura, et multa alia flumina. 「その湖の別の部分に（隣に）塩水海の湾があり、ゲルテラン（ゲルケラン）海〔カスピ海〕と呼ばれ、周囲約 300（600）マイルあって、他のどの海からも 12 日行程離れており、その海に、聖書に書かれてあるように天国の四川の一つであるユーフラテス川かナイル川、それに他の多くの川が注ぎ込んでいる」

疑いようもないこの LB との一致から、これらの章で I が我々に提供している新しい記事を、追加やさらなる展開として容易に取り出すことができる。用心のため——今では余計だったとは思いますが——私はまず最初 I が、より広範なテキストに基づいてなされた最初の読みの記憶を、前にしていた LB のコピーと混ぜ合わすことをでき得たと認めたいと思い、次に私のテキストの脚注にそれに特有の事項のいくつかを転記した（XXI 7,12, XXII 13）。まずもってしかし、それほど名誉には値しなかったようである。

8 このグループの本質的重要性

マルコは、ジェノヴァでの補囚からその生涯の最後の日まで、ルスティケッロによって編まれた自分の回想記を何度も読み返し、その度に手元にあった稿本に、自分の古い書類の中に再発見したり、思い出したり、我々には分からぬ何らかの理由で最初の時そのままになっていたたりした、新しい記事を書き加えた、そして後にそれら新記事が作品の新たなコピーの中に次々と取り込まれていった、というのが今なおまかり通っている考えである。口頭による補足を語った者もいた。つまり誰かが彼の口から出た新たな話を、ひょっとして語り手の知らぬ間にその原稿の中に紛れ込ませたと。甥の書に何か付け加えて豊かにしたのは叔父のマッテオだった、との推理も提出された^{5 6)}。またある者は、ジェノヴァ後「著しく豊かな」稿本がかの最初の協力者の助けなしにマルコ自身によって作られ、それもまたラテン語ではなくフランス語だったのではあるまいか、と

推定した⁵⁷⁾。要するにマルコの手には、その生涯の様々な時期に直接あるいは間接にマルコ自身によって手が加えられますます豊かになった様々な版が存在した、というのが既定のここのように見なされている。この仮定が――それは理にかなったというより抽象的なものだが――必要でも有益でもないことは、我々はすでに見た。今に伝わるポーロの諸版の客観的分析は、これまた当然受け入れられるべき別の結論へと我々を自然に導いた。すなわち、‘書き加え’られて漸進的に豊かになったのではなく、削り取られて徐々に貧しくなっていたのである。追加が口にされた最初は、ピピーノの訳版についてであった。すなわち、FもF¹の派生版も知らず、自分の町の図書館にある何かずたずたにされた版の中にマルコの生の言葉を見ていた人たちにとって、祖国ヴェネツィアでの当然享受すべき休息中に、マルコが自分の本に追加して膨らませ、全体的に再調整したのであるとの考えを抱かせるには、Pのまだ知られていない何らかの独自の記事で十分だった。Fの出版はそうした誤りから解放するはずだったが、どの批評家もすでに知られていた写本の助けだけではその版を全体的に再構築することはできず、かといって一方ではFを最も高く評価されていたテキストのどれかの見直された形、二次的段階と考えることもできなかった。ところが、Fにない何かは何らかの稿本に発見される度に、Fが祖本すなわちジェノヴァでの最初の編纂であること、つまりまさに追加について確実に語ることをするための不可欠の基盤として求められることになり、かくてかの理論は新たな力を獲得することとなったのである。すでにかなり崩れたその言語や頻繁な欠落には注意が向けられなかった。Fが今に伝わる唯一のフランク・イタリア語テキストではあるが、その言語で書かれた稿本は数多かったにちがいないことは省みられなかった。例えばその兄弟F³（あるいはさらに正確にはVAのとても豊かな原本）がFに対してあるように、すなわちFの一つの縮小したコピーであるのと同じように、Fも真の原本に対してそのように有り得ることを夢にも想像しなかった。Fに対するFG・TA・VAについて、またそれぞれの祖本に対するこれら三つの大家族の派生版について我々が立証してきたこと、すなわち読みと内容の漸進的劣化はF以前の伝承においても起こっていたかもしれないことを‘アプリアに’退けることはできない。Zの発見、VとLの研究、ラムージョ版の分析、それに失われたギジ稿本に遡り得る諸要素の選

別、これらは、Fより前にさらに保守的でさらに正確なコピーのあったことを我々に具体的に確信させた。それらがさらに完全であったとしても自然なことではないだろうか。Fをもって実質的にマルコのオリジナルと同定できる、というこの支持できない考えが崩れたとなると、原本は再び確かに残念ながら遠い未知のものとなる。しかしそれとFを隔てている距離を埋めるのを、ここに検討してきた諸テキストが大いに助けてくれる。VBとIについては、その正確な価値評価が、Fに先立つ段階を少なくともそれらとは独立に認めるかどうかにかかっているから、脇に置いておこう。しかしZ・Z¹・V・Lは、本書が取り組んだ批評の問題にとってまさしく本質的な重要性を備えている。それらは、すっかりまた常に望ましい確実さをもって今述べた隔たりを埋めることはおそらくないにしても、ポーロのテキストに一つの正確さと一つの揺るぎない堅固さを与えるに十分であることは否定できない。内容の豊かさにおいて我々を大きくオリジナル版に近づけるだけではない。またZとZ¹によって証されている最も古い段階と、Fとそれに類する稿本によって証されている段階との間に一つの中間の段階、VとLが属する段階のあることを垣間見させることによって、上に述べたごとき漸進的貧困化を跡づけているだけではない。これら三つの段階のそれぞれの根底に、多かれ少なかれFによく保たれている同一のフランク・イタリア語テキストのあったことを証明するのである。すなわち、今に伝わるフランク・イタリア語版の唯一のコピー[F]の完成のみならず、それが本物であることの証明とその復元に貢献するのである。

これらのテキストの全体的重要性和この私の版の記録的性格からして、ポーロからのものである可能性が少しでもある箇所は全て、Fを補うものの中に採り入れられたのは当然であった。個々の疑わしい場合における決定は、私の明敏な読者と、今後の新たな稿本の発見に委ねる。

1*. Marco Polo, *Il Milione*, prima edizione integrale, a cura di Luigi Foscolo Benedetto, Firenze Leo Olschki 1928,の前半を構成するベネデットの写本研究 ‘Introduzione: La tradizione manoscritta’, Cap.VI:La fase anteriore a F.,pp.clix-cc,の訳である。原典からの語句および文の引用には、適宜原文とその和訳もしくはその一方を付けた。紙数の関係上、引用例が多く一部を省略した場合は、[以下略]と記した。原註は大幅に省略した。‘ ’内は引用文中イタリック体の箇所、[]内は訳者補足、*は訳註。(《大阪国際女子大学紀要》25-1, 1999より再録。)

【原註】

1. G.B.Ramusio (1485-1557) については、E. A. Cicogna, *Delle iscrizioni veneziane*, II, Venezia 1827, pp.315-330 参照。*Navigazioni e Viaggi* 第2巻の再版については、同書 pp. 322, 435 参照。1574, 1583, 1606年の再刊は確かだが、1565, 1613年の再版本というのはおそらく存在しない。

2. ヴェネツィア総督宮盾の間を飾る壁画地図の東側部分は、全面的にラムージョから想を得たものである。近代の修復で原画が忠実に復元されたとの言い伝えが信頼に値するものなら、その作品の影響より作者自身の直接の協力が語られるべきであろう。

3. W. Marsden, *Travels of Marco Polo* は、Wrightによって地理学会テキスト(F)からの新たな数章(第1巻 cap. XI, 第3巻 capp. XLVII-LXXI)を加えられて、古典となったYuleの作品の後も出版され続けている。*The travels of Marco Polo the Venetian*, with an introduction by John Masefield, London & Toronto, 1926 参照。

4. Baldelli-Boni, *Storia del Milione*, pp.VIII, XVII, XVIII, LXXI-II 参照。

5. *Die Reisen des venezianers Marco Polo im dreizehenten Jahrhundert*, zum ersten Male vollstanding nach den besten Ausgaben Deutsch mit einem Kommentar von A.B., nebst Zusätzen und Verbesserungen von K.F.Neumann. ラムージョのドイツ語訳はすでに1802年 Felix Peregrinによって出ていたが、何の成功も見なかった。Burck の訳はまずまずの成果を収めた。1855年にH.Lemkeによるその増補改訂版が出た:*Die Reisen des Venezianers Marco Polo in 13. Jahrhundert bearbeitet und herausgegeben von Dr.Hans Lemke*, Hamburg 1907.

6. キリスト教に対するクビライの考えに関するRの章については、pp.252-3 (我々の版の pp.70-1) 参照。

7. Introduzione, p.100.

8. *Travels of Marco Polo*, 1847, p.31.

9. Murray のこの考えを、Lazari, Introd., p.LVI が受け売りしている。その Lazari を今度は Bianconi, 1^a memoria, p.54 が繰り返している。そうしたことの無意味さは、すでに Yule, Introd., p.100 に指摘されている。

10. Zurla, op.cit., p.19. Bartoli, op.cit., pp.XXXIII-IV. Cfr. Bianconi, 1^a memoria, p.39.

11. Petermanns Mitteilungen, XXIX, p.124.

12. *Storia del Mil.*, pp.CXXXV-VI, および Baldelli-Boni に基づいて Cordier-Yule のリストの no.61。しかしこの写本は、D. Jose Ma Octavio de Toledo, Catalogo de la libreria del Cabildo Toledano, Madrid 1903, in 《Bibl. de la Revista de Archivos, Bibliotecas y Museos》, t.III には記載されていない。また、同図書館現事務局に宛てた同写本についての私の照会に対して返事がないままである。[訳註 3*) 参照]

13. アンブロジーナ図書館のカタログには、同手稿は G. A. Scalabrini によるコピーと誤って記載されているが、上に引用した文には二人の写字生の名が挙げられている。

14. 間違いや恣意的な訳はごく僅かである。数値については F との不一致は結構数多い。cc.16-17 で訳者は奇妙にも我々の XXXVI-VII を混ぜ合わせてしまっているが、これはおそらくマルコの記す二重の行程を考慮しなかったためであろう。

15. F の私の版では底本として選んだ写本の読みを可能な限り保つことにしたが、ごくまれにセラダ写本の文体上のヒントを受け入れた (CXVIII 48, CCXXIX 12)。

16. Cordier-Yule, I, p.276.

17. G.Orlandini, *Marco Polo e la sua famiglia*, in *Archivio Veneto-Tridentino*, XI, p.20 は、マルコがいつも自分だけ主役となり、旅の先達でもあった父と叔父を登場させていないのは遺憾だ、と言う。我々のテキストの p.158 (CLVII 19) を見られたい。こうした判定が不当に厳しいものではないかと疑わせるもう一つの理由が見出されるであろう。

18. *Magnus et Capricornus (1299-1308)*, c.82.

19. R と Z が一致するときは常に私の註に示した。言うまでもないが、極めて短い箇所の場合はラムージョの忠実さは完全ではない。

20. Cap.LXI の追加 b, p.101 の Z からの引用の後の私の見解、cap.CXX の追加 e、cap.CLXVII の追加 e を見られたい。

21. LVIII 4, LXXIV 27 CXII 6 の脚注に再録した箇所、私は *turchi nestoriani*＜ネストリウス教徒のトルコ人＞のことだと思うが、ラムージョは常に *turchi e nestroiani*＜トルコ人とネストリウス教徒＞と、二つのグループに解釈する。

22. もちろん私はこの謎の写本を追跡する調査の労を惜しなかった。少なくとも、ラムージョに情報を提供したラムージョ自身がなんとも漠然とした形で語っている、それに劣らず謎めいたかのヴェネツィアの貴人を突き止めればと願っていた。Ghisi 家はヴェネツィアの古い貴族の一つであるが、家系譜作者やヴェネツィア国立古文書庫の記録や 16 世紀の書簡集に記載されている Ghisi 家の誰も、確実に Z¹ の所有者と同定することはできない。Girolamo Alessandro Capellari の *Campidoglio Veneto* (Bibl. Marciana, cod.8305, vol.II, Ghisi の項) には、1500 年代「有徳の貴人 Paolo Ghisi は *Portolano*＜航海案内書＞なる一書を書いた」と記載されているが、この情報に正確な日付もそれ以上の調査に向かわせる何のデータも付けられていない。また Agostini はその *Scritt. Veneziani*, t.I, p.XLVII で、数学者 B.Zendrini の図書館でさる「ヴェネツィアの貴族」Marco Ghisi の *sentenze bibliche*＜聖書格言集＞の写本を集めたものを見た、と記しているが、彼もその年代についてのデータは何も挙げていないし、私には Marco の *sentenze bibliche* というのも Paolo の *Portolano* に劣らず探し出すのは困難に思える。

23. Cordier, *Addenda*, pp.54-5.

24. O.Tiberi, *Il Milione di Marco Polo*, Firenze 1916, p.X.

25. 信を置かない人たちの中に、ポーロのテキストの功績高い収集者である Toaldo その人を数えなければならないのは遺憾であるが、彼はアンブロジーナ写本の中で Z について次のような判定を下している：「確かにラテン語稿本だがまさに野蛮なラテン語である。これは、フィレンツェのマリアベキアーナ図書館に所蔵されているアカデミーの *della Crusca* の名で呼ばれるエトルスク〔トスカナ〕語稿本の訳あるいはむしろ書き換えと見られる。まさに欠伸の出るような文体で書かれており、多くの箇所で語のみならず文章も省略されたり移し換えられたり繰り返されたりしている。‘訳者は、それが誰であれ、適性を欠く人物だったと見られ、信じ易い男、夢想家、作り話家、議論好き、子供、か弱い女、全くの馬鹿といった部類に属し、それ故これだけに報告されている独特のことは全面的に信用することはできない。したがってその使用には充分注意してかかる必要があろう……’」。

26. Cfr.Lazari, *Introduzione*, pp.223-265.

27. Cfr. *Kurzes Verzeichnis der romanischen Handschriften*, in

Mitteilungen aus d.konigl. Biblioth., Berlin 1918,p.89. この稿本は以下に詳細に記されている：L. Biadene, I manoscritti italiani della collezione Hamilton nel R. Museo e nella R. Biblioteca de Berlino, in Giorn. Stor. della lett. Ital. X, 1887, pp.342-3.

28. Ediz.di Parma, t.II, pp.299-300.

29. このパドヴァの写字生の作品に付けられたタイトルは全く恣意的なものである：「1260年頃活躍したヴェネツィアの貴人マルコ・ポーロ殿による特に海の旅の報告」。

30. こうした改竄を来たしているテキストでは、固有名詞や専門用語が考え難いような変形を被るのは余りにも明らかである。例：Adin (Yasdi), Balabac (Balc), Chouintalis (Ghinghintalas), Nagani (Nacigai), Chapetin (Campiciu), Gaidin (Naian), Achebelac (Acbaluc), Gaudun (Gaidu), Ruen (Mien), Mongin (Mangi), Guiazanis (Quiansui), Ziargati (Zaitun), Chunichan (Cin), Manbut (Maabar) etc.

31. 両方とも、例えば Yangiu<揚州>の章で、マルコの統治についての重要な記事を全く黙している。

32. 最初の2版は1706年と1736年。Ediz.di Parma, II, p.301の該当箇所参照。

33. 最初に報告したのは、Lazari, p.448, no.5.

34. Heinemannの前掲カタログ t.VIII, pp.283-4に記載。

35. J. Denuceの報告に基づき、Cordier, Addenda, p.134に記載。

36. Lからの引用は特に指示しない場合はフェッラーラ稿本より。

37. したがって、それだけで独自のグループをなすかのごとく『『ミリオネ』のヴェネト語テキスト』といった一般的な言い方ができないことを、読者は納得されたことと思う。

38. 現状では最初の13枚が落丁しており、また私の知る限りペトラルカ研究者に知られていない。

39. Ramusio, Ramnusus, Rannusioの形は区別なく用いられた。より頻繁に使われたのは、Giambattistaの時代には最後の二つ。

40. 少なくともこのことについては、Murray, ediz. cit., pp.37-8からCordier-Yule, II, p.531, no.6にいたるまで、全ての研究者が一致している。この稿本については、cfr. G.Fanchiotti, I manoscritti italiani in Inghilterra.Serie I. La collezione Sloane, Londra 1899, pp.25-7.

41. Yuleの読みは<Cabual Volanesso>, Lazari, p.458, no.45は<Cabual Volassero>.

42. 引用は ms. Cicogna より。
43. 読みは時として F のそれより好ましい場合がある : cfr. LXXIV 45, CLXXVIII 11, CCXXIX 10 の註。
44. いわゆるラムージョの補筆の二つが Cod. Dona delle Rose にあることは、Olivieri, vol.cit., Atti dell'Ist.Veneto, 1904-5, p.1657 に指摘された。
45. onorata<位の高い>の語は VB にはなく、ラムージョの追加である可能性が極めて高い。
46. この文は Lazari, p.251 にラムージョの主たる新記事のリストの中に引かれている。
47. Lazari, p.265 に、ラムージョの典型的な新記事として挙げられている。
48. V も同じ意味で貢献しているが、ごく小さな規模である。
49. R のいくつかの誤りは私の知る限り先例がなく、おそらくラムージョ自身に帰されるべきものであり、翻訳におけるその表面性と安直さが、他版と対照できる箇所の場合から証明される。
50. R と Z が相容れない事を述べている場合は、残念ながら絶対的なことは何も決定することはできない。私の版では、一致しない箇所をコメントすることなく再録するにとどめた。Z も誤りがなくはないが、信頼を抱かせることがより少ないのはいずれにしても R の方である。用いた典拠に対する彼のはなはだしい軽率さが確認できる場合が余りにも多い。しかし多くの場合 Z と R ははっきりと補完し合い、オリジナルテキストを得るためには読者は両者を融合させなければならない。
51. 同稿本は、O.Holder-Egger, *Über die Handschriften der <Imago mundi> des Jacob von Acqui*, in *Neues Archiv.*, XVII, 1892, p.499 に記載されている。Zurla 以降全てのポーロ研究者がこれに言及している。特に cfr. Bartoli, p.XII-XV.
52. G.Porro, *Trivulziana - Catalogo dei codici manoscritti*, Torino 1884, pp.270-1 に記載あり。
53. Cronaca の成立年代については、cfr. D.Bianchi, Jacopo d'Acqui, in *Nuovi Studi Medievali*, I, 1923, pp.138-43.マルコ・ポーロがすでに死者として想起されている事実が、他のデータに付け加えられるべきである。
54. Jacopo がタルタル人について語っているところは他の著者から採られており、そのやり方からして、「紙幣」についての言及自体もポーロからでない可能性がある。「山の老人」についての章はマルコの話と大きく異なる。教皇 Clemente IV へのモンゴル人使節についての章で、Gregorio X のことが述べられている : 「使節一行を迎えた彼は、cogatal<コガタル>と言うそれらタルタ

ル人の長に洗礼を施した」！

55. Lazari がそのリストの no.6 に、Jacopo のポーロの箇所は Pipino からの抜粋であるとのバカげた見解を書いたものだから、この *excepta*＜抜粋＞がそれ以後検討の対象とならず、ごく最近まで刊行されなかったのもそのためである。つい最近 A. A. Michieli の前掲論文 pp.157-66 に刊行されたが、その転記は原文に忠実でない。

56. Yule, *Introd.*, p.100.

57. 例えば、Klaproth, in *Nouv. Journ. Asiat.*, 1833, p.252.

【訳註】

2*. ラムージョについては、拙稿「ラムージョ：マルコ・ポーロの書序文(一)」《愛媛大学教養部紀要》24、1991 参照。R と Z のテキストは、マルコ・ポーロ／ルスティケッロ・ダ・ピーサ『世界の記—東方見聞録対校訳』名古屋大学出版会 2013 (F・Z・R 三版対校訳)。

3*. セラダ手稿の原本はその後、1932 年トレドでパーシヴァル・デーヴィッド卿によって発見され、1938 年ムールによって出版された。したがって今では、その原本が Z、ベネデットがアンブロジアーナ図書館に発見したトアルドによるその写しが Z¹ と呼ばれる。両写本の異なりについては、cfr. L.F.Benedetto: Nota marcopoliana a proposito del codice Ghisi 《*Atti del Reale Accademia d'Italia, rendiconti della Classe di Scienze morali e storiche*》 XVII 1939, pp.15-45.

4*. 以下「書き出し」と「結び」の和訳は、特に注目すべきもの以外省略する。

5*. ベネデット版 F では、第 95 章が二つに分割され、FG から補った前半が 95 章、残りが 96 章とされている。したがって、第 96 章以下は他の F 版より章ナンバーが 1 増える。

6*. 一般には、その辺りから写字生が代った可能性の方が高いとみなされる。

7*. 以下全て、ローマ数字はベネデット校訂版 F の章、アラビア数字はその行、その後にアルファベットのついている場合はその脚注に再録された他テキストからの記事、を指す。

8*. F: Mogdasio である。同章 (§ 208) では、内陸部のモガディーショ地方とマダガスカル島が混交して述べられている。

9*. キリスト教徒ではなく、マニ教徒とみなされる。

10*. インド人ではなく、福建の漁民の風習とされる。

11*. 1797 年 4-5 月、ナポレオンの侵攻によるヴェネツィア共和国の崩壊と

親仏政府の樹立を指す。

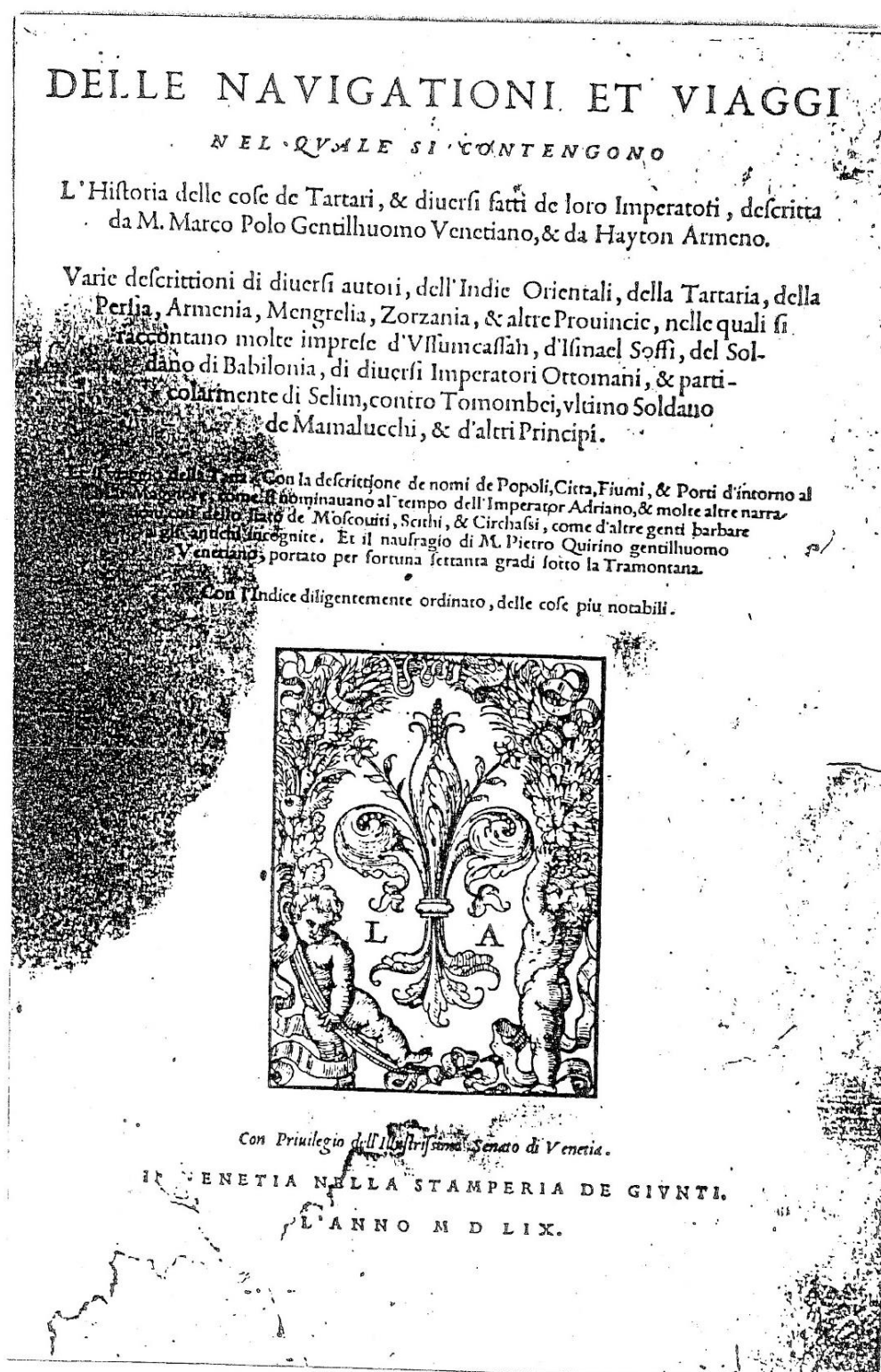
12*. 「アンコーナ Ancona」は、アドリア海西岸のイタリアの町。

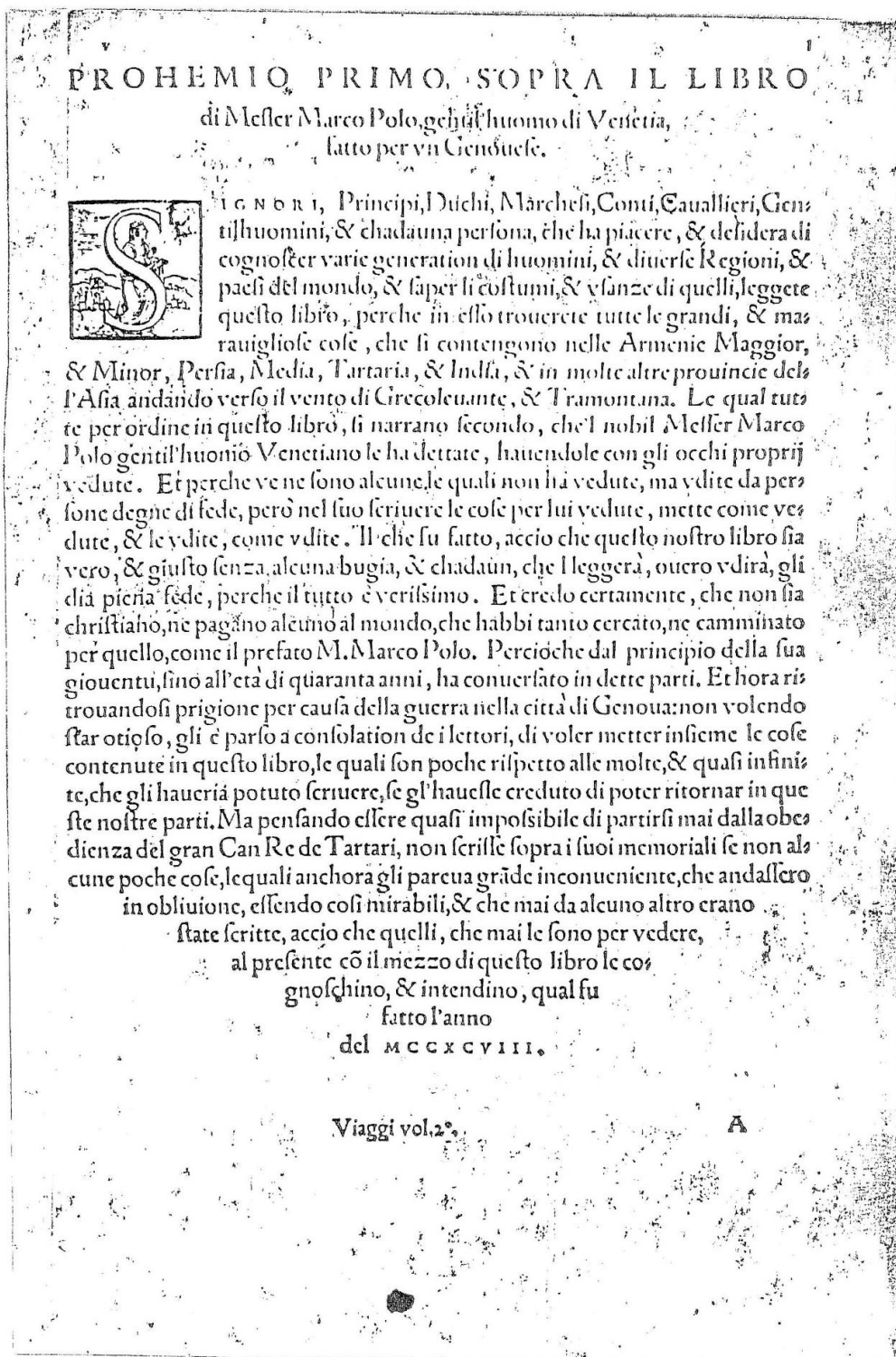
13*. 以下意味不詳につき訳さないでおく。

14*. 原文ではここでもトリヴルツィアーノ写本からの異読が括弧内に引用されているが、省略する。

15*. 和訳は後者 (I) のみ。大きな異なりのあるものは、前者 (LB) を括弧内に記した。

図 2 R 初版本 (Venetia, Givnti, 1559) タイトルページ





PROHEMIO SECONDO SOPRA IL LIBRO

de M. Marco Polo, fatto da Fra Francesco Pipino Bolognese dell'ordine de i
Frati Predicatori, quale lo tradusse in lingua latina, &
abbreviò. Del MCCCXX.



PE R prieghi di molti Reuerendi padri mei Signori: io tradurrò in lingua La-
tina dalla volgare, il libro del Nihil, Sauio, & honorato M. Marco Polo gen-
tilhuomo di Veneria, delle conditioni, & vsanze delle Regioni, & paesi del
Oriente, dilettandosi hora i prefati miei Signori piu di leggerlo in lingua latina,
che in la volgare. Et accio che la fatica di questo tradurre non para vana, & inutile, ho conside-
rato, che per il leggere di questo libro, che per me sarà fatto latino, i fidel huomini, che sono suo-
ri dell'Italia, possono riceuer meruto da Dio di molte grazie. Però che essi vedendo le marau-
gliose operationi di Dio, si potranno molto ammirare della sua virtù, & sapientia. Et conside-
rando, che tazzi popoli pagani sono pieni di tanta cecità, & orberza, & di tante spurcie, li
christiani ringratiaranno Dio, il quale illuminando i suoi fedeli di luce di verità, si ha degnato
di cauarli da così pericolose tenebre, menandoli nel suo marauiglioso lume di gloria. ò che quelli
christiani hauendo compassione, & cordoglio dell'ignoranza di detti pagani, pregheranno Dio
per lo illuminare de i cuori di quelli, ò che per questo libro, la durezza, & ostination de i non de-
ueti christiani si cononderà, vedendo gl'infedeli popoli piu pronti ad adorare gli Idoli falsi, che
molti christiani il Dio vero. ò forse, che alcuni religiosi per amplificare la sede christiana, veden-
do, che l'nome del nostro Signor Dolcissimo è incognito in tanta moltitudine di popoli, si com-
moueranno ad andare in quei luoghi per illuminar quelle accecate nationi de gl'infedeli. Nel
qual luogo secondo che dice l'Euangelio, è molta biada & pochi lauatori. Et accio che le cose,
che noi non vsiamo, nè hauemo vedute, le quali sono scritte in molte parti di questo libro, non pa-
rino incredibili, à tutti quelli, che le leggeranno. si dinota, & si manifesta, che l'sopradetto M.
Marco rapportator di queste cose marauigliose cose, si huomo sauiio, fedele, deuoto, & adornato
di honesti costumi, hauendo buona testimonianza da tutti quelli, che lo conosceuano. si che per
il merito di molte sue virtù, questo suo rapportamento è degno di fede. & M. Nicolo suo padre,
huomo di tanta sapientia similmente le confirmaua, & M. Massio suo barba, (del quale questo
libro fa mentione) come vecchio deuoto & sauiio, essendo su'l ponto della morte familiarmente
parlando, affermò al suo confessore sopra la coscienza sua, che questo libro in tutte le cose con-
teneua la verità. Il che hauendo io inteso da quelli, che gli hanno cognosciuti, piu sicura-
mente, et piu volentieri mi affaticarò à traslatarlo per consolatione di quelli, che
lo leggeranno. & à laude del Signore nostro Iesu Christo creatore di tut-
te le cose visibili, & inuisibili. Qual libro fu scritto per il detto M.

Marco del 1298. trouandosi pregion in la città
di Genoua. & si parte in tre libri,
i quali si distinguono per
proprii Capitoli.



図 5・6 ラムージ像

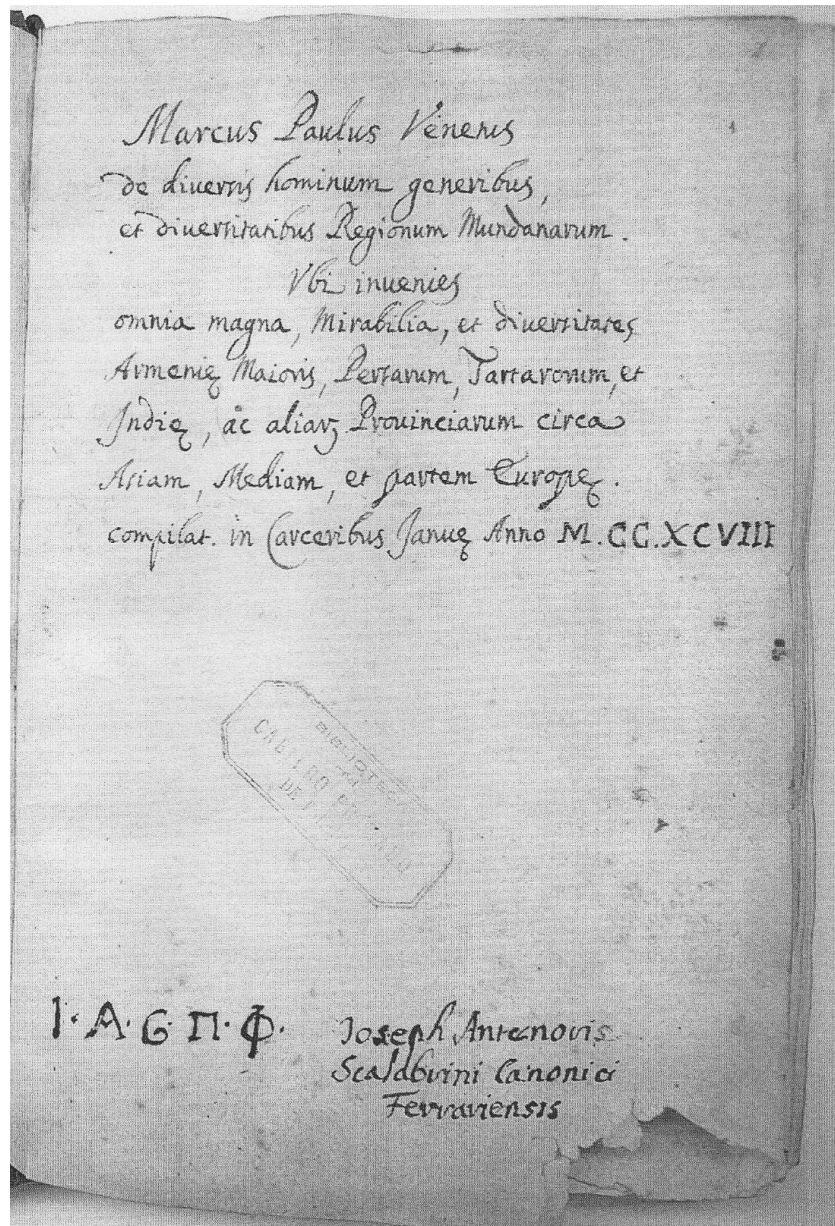


[Liber Liber]



[Wikipedia]

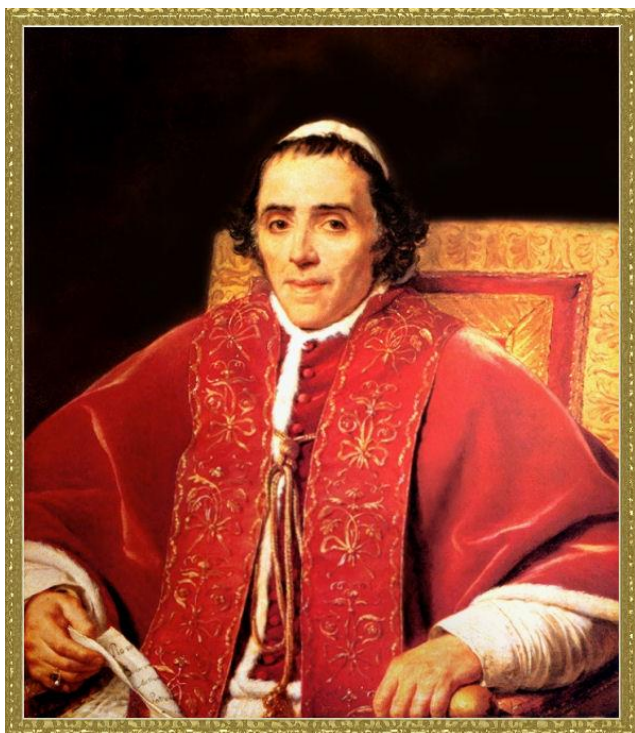
図 7 Z タイトルページ (Toledo, 49.20.Zelada, f.1r)



Marcus Paulus Venetus de diuersis hominum generibus, et diuersitatibus Regionum Mundanarum. Vbi inuenies omnia magna, Mirabilia, et diuersitates Armenie Maioris, Persarum, Tartaronum, et Indie, ac aliarum Prouinciarum circa Asiam, Mediam, et partem Europe. Compilat. in Carceribus Janue Anno M.CC.XCVIII.

I·A·G·II·Φ . Joseph Antenoris Scalabrini Canonici Ferrariensis

図 9・10 セラダ像



Inapic plagu libri qui vulgan lxiii dē Ethiochote.

Mobilis et quatuordecim annis paulo de Venetis. a. 26. annis et
i. patib. maioris a. 26. p. m. a. 26. d. u. l. i. s. n. a. t. e. q. l. o. g. i. q. u. a. s. p. a. m. b. u. l. a. t. o. p. u. n. i. a.
a. s. t. a. n. n. b. i. s. q. m. o. i. n. g. r. a. t. i. s. d. u. i. s. c. e. b. o. i. n. m. o. r. e. s. m. u. n. i. a. n. t. q. m. u. l. t. a. q.
m. o. r. i. t. a. u. d. i. u. n. t. i. r. e. l. i. q. u. e. c. o. i. c. a. n. t. d. i. s. p. o. s. i. t. u. t. V. t. a. u. t. q. u. e. d. i. c. t. a. s. u. n. t.
d. i. m. a. n. s. p. e. c. i. a. n. t. f. i. a. l. i. o. r. e. q. u. e. b. e. a. n. t. i. n. t. e. l. l. i. c. i. t. i. n. s. i. a. n. t. e. i. a. d. p. r. e. s. e. n. t. i. a. s. r. e. d. i. t. i. p. a.
p. a. r. t. i. o. n. a. l. i. p. p. o. n. e. t. Q. u. o. d. c. o. n. s. t. a. n. t. i. n. o. p. o. l. i. a. u. e. n. i. t. a. d. B. e. r. t. h. a. c. h. a. r. d. i. n. i. o. c. a. d. e. n. t. i. s.
A. n. n. o. x. p. i. a. c. e. l. t. p. q. u. o. b. a. t. o. m. u. s. c. o. n. s. t. a. n. t. i. n. o. p. o. l. i. i. p. b. a. t. N. o. b. i. l. e. s. u. n. t.
N. i. c. h. o. l. a. u. s. p. a. u. l. o. p. a. t. e. r. d. i. n. i. o. c. a. d. e. n. t. i. s. p. a. u. l. o. q. u. o. a. p. h. e. n. i. s. p. a. u. l. o. f. i. e. s. a. i. c. o. r.
m. a. i. m. o. n. i. u. s. c. o. n. s. t. a. n. t. i. n. o. p. o. l. i. p. u. e. n. i. u. n. t. a. d. u. i. a. d. l. o. c. a. p. o. n. t. i. a. m. a. i. o. q. u. o. m. a. r. e. m. a.
v. i. a. f. u. e. r. d. i. s. p. o. n. e. n. t. m. a. r. e. l. u. a. c. i. p. l. i. m. a. q. u. e. p. u. l. c. h. e. m. a. q. u. e. m. a. g. n. i. u. a. l. o. i. s. i. o. c. a.
h. a. c. o. n. s. t. a. n. t. i. n. o. p. o. l. i. p. a. o. i. n. u. e. n. i. u. n. t. P. o. s. t. b. e. c. i. m. a. r. e. m. a. i. o. m. e. n. t. a. n. t. e. s. s. o. l. d. a. d. i.
a. m. u. s. q. u. e. n. a. u. i. g. i. o. p. u. e. n. i. u. n. t. D. e. n. t. e. p. f. i. a. m. u. s. q. u. e. a. d. B. o. l. g. a. n. i. a. q. u. e. s. a. r. i. a. c. u. t. e. r.
i. n. u. e. n. i. u. n. t. B. e. r. t. h. a. c. h. a. r. d. i. n. i. o. c. a. d. e. n. t. i. s. o. i. u. m. t. a. t. a. r. o. r. o. c. a. d. e. n. t. i. s. q. u. o. s. a. i. h. o. n. o. r. i. f. i. c. e. r. e. c. e. p. i. s. s. i.
e. i. a. i. c. t. a. q. u. e. p. o. t. u. i. a. n. t. i. o. c. a. l. i. a. d. o. n. a. u. e. n. i. u. n. t. E. t. a. n. c. u. a. l. t. e. t. a. l. i. a. p. l. a. u. d. e. n. t. i. s. n.
d. u. p. l. i. u. a. l. o. i. s. c. o. r. t. r. i. b. u. e. n. s. e. a. r. e. c. e. p. i. t. Q. u. o. d. e. g. r. e. s. s. i. f. i. e. n. t. i. s. o. i. u. m. t. a. t. a. r. o. r. o. c. a. d. e. n. t. i. s.
Q. u. o. d. u. i. o. p. e. l. i. c. i. f. i. e. s. i. n. c. i. s. B. e. r. t. h. a. c. h. a. r. d. i. n. i. o. c. a. d. e. n. t. i. s. p. a. u. l. o. i. s. p. m. i. s. s. i. s. s. e. n. t. a. d. e. n. t. i. s.
i. n. e. B. e. r. t. h. a. c. h. a. r. d. i. n. i. o. c. a. d. e. n. t. i. s. q. u. e. a. l. i. u. d. i. n. i. o. c. a. d. e. n. t. i. s. o. i. u. m. t. a. t. a. r. o. r. o. c. a. d. e. n. t. i. s. d. i. s. s. e. n. t. i. s.
q. u. e. r. i. t. a. m. a. g. n. a. o. c. a. d. e. n. t. i. s. q. u. a. d. e. c. a. i. t. e. r. r. e. u. i. t. e. n. d. i. s. o. l. d. a. d. i. a. n. i. p. e. c. i. a. n. t. e. r. e. s. i. c. g.
a. i. c. o. r. m. a. i. m. o. n. i. u. s. d. i. s. p. o. s. i. t. u. e. n. t. i. s. o. i. u. m. t. a. t. a. r. o. r. o. c. a. d. e. n. t. i. s. a. i. n. u. e. a. d. t. a. c. t. e. s. t. a. n. t. i. e. r. i. a. p. o. s.
s. e. D. e. B. o. c. h. a. m. g. r. e. c. e. n. t. e. s. p. u. e. n. i. u. n. t. a. d. a. n. t. i. e. n. t. i. s. o. n. d. a. c. h. e. b. e. d. a. q. u. e. e. m. f. i. n. e. r. i.
g. m. d. i. o. c. a. d. e. n. t. i. s. q. u. e. m. e. r. e. c. e. n. t. e. s. i. n. s. u. e. n. t. i. s. f. l. u. m. e. n. t. i. s. t. a. g. n. i. s. t. e. m. t. e. i. n. s. u. e. n. t. i. s. p. r. e.
f. i. t. i. s. q. u. a. r. t. a. l. o. g. i. n. i. s. d. i. c. t. i. s. u. b. i. n. u. l. l. i. a. d. e. s. t. a. n. t. i. s. i. n. c. a. s. t. i. s. o. i. b. l. i. t. a. t. a. n. i. t. i. n. t. e.
i. n. s. a. i. c. o. r. l. u. t. i. s. u. a. g. a. n. d. o. m. a. n. e. t. Q. u. o. d. u. e. n. i. t. a. d. B. u. c. h. a. r. d. i. n. i. o. c. a. d. e. n. t. i. s. p. u. i. a. j. e. d. i. n. i. o. c. a. d. e. n. t. i. s.
E. t. a. n. t. i. p. u. i. s. s. i. t. o. d. e. s. t. o. p. u. e. n. i. u. n. t. a. d. m. a. g. n. a. q. u. e. n. o. b. i. l. e. s. a. n. t. a. t. e. s. B. u. c. h. a. r. d. i. n. i. o. c. a. d. e. n. t. i. s.
E. t. m. e. l. i. o. r. a. n. t. i. s. t. e. a. n. s. p. s. i. e. p. u. i. a. a. i. i. n. q. u. a. b. e. c. a. n. t. i. s. m. a. n. e. t. B. u. c. h. a. r. d. i. n. i. o. c. a. d. e. n. t. i. s.
D. e. a. n. n. o. R. e. x. a. i. c. d. i. c. h. i. t. B. a. r. a. d. i. q. u. e. t. u. c. n. e. c. a. i. u. r. n. e. c. r. e. t. e. r. e. p. o. t. a. n. t. i. i. p. a.
a. n. t. i. t. a. t. e. t. u. b. i. a. n. s. o. i. s. p. m. a. s. e. u. i. t. D. e. l. e. g. a. t. o. R. e. g. i. s. M. a. i. n. q. u. i. c. o. s. d. u. r. a. t. a. d. m. a.
i. n. s. i. m. o. r. i. g. i. t. u. d. e. f. u. s. i. u. e. n. o. b. i. l. e. s. q. u. e. d. i. n. u. n. i. a. n. t. i. s. l. e. g. a. t. i. g. m. u. r. a. n. e. m.
A. l. i. u. r. e. g. i. s. o. i. u. m. t. a. t. a. r. o. r. o. c. a. d. e. n. t. i. s. q. u. e. m. u. t. e. b. a. t. a. d. a. u. l. a. y. m. a. g. n. i. u. s. a. n. t. i. s.
d. i. n. i. o. c. a. d. e. n. t. i. s. o. i. u. m. t. a. t. a. r. o. r. o. c. a. d. e. n. t. i. s. q. u. e. u. i. n. d. i. s. s. i. b. o. x. f. i. e. s. q. u. e. i. p. a. t. o. i. l. l. u. s. i. n. q. u. e. f. u. i. s. s. i. t. l. a. a.
n. o. u. i. a. t. m. i. r. a. t. i. s. e. u. a. l. t. e. e. t. a. i. i. p. o. s. n. o. u. i. t. e. e. m. a. t. e. d. e. s. t. a. l. l. a. l. l. o. c. a. u. i. s. e. s. i. n. i. a. n. t. e.
p. l. a. c. e. t. b. u. l. i. a. t. e. l. h. o. n. o. r. e. q. u. e. m. u. n. i. a. p. u. a. z. i. o. C. u. i. a. i. r. e. s. p. o. d. u. s. s. e. n. t. s. e. p. u. t. o. s. p. p. o. s. s. e. i.
o. i. b. y. o. b. e. d. i. u. r. d. i. a. t. a. d. m. a. g. n. i. u. s. a. n. t. i. s. o. i. u. m. t. a. t. a.

Exortu et fraglata de libro du marchy paul de benecois de diversis pincis et
regnis asie maioris. et de diversis moribus hincindis. et de multis mirabilibus
in hys locis

Nihil et discretus vir dno. archiepiscopus paulo de benedictis. in 120. anno. omnibus. i. p. p.
maioris. aspe. p. missis. diuisis. ualde. et. longinquas. p. m. b. t. d. p. u. n. c. i. a. s. d. n. i.
h. i. s. q. u. i. n. o. i. n. g. e. n. t. u. r. d. i. s. p. o. s. i. t. u. r. m. o. r. e. s. i. m. i. r. a. b. i. l. e. s. m. i. l. i. t. q. u. e. u. i. d. e. t. a. u. d. i. u. r. q.
i. r. e. l. i. q. u. i. s. o. m. n. i. n. i. c. a. r. e. d. i. s. p. o. s. i. t. u. r. E. t. u. t. a. u. t. q. u. e. d. i. c. t. a. s. u. r. o. r. d. i. n. a. u. i. s. p. a. r. t. e.
p. u. l. c. i. o. r. e. m. q. u. e. h. a. b. e. a. n. t. i. n. t. e. l. l. e. c. t. u. s. i. t. a. p. p. o. s. i. t. u. r. o. i. u. s. d. e. p. r. o. i. l. l. a. s. r. e. d. d. i. t. u. r. q. u. e. a. d. p. p. i. a. s. p. o.
s. u. l. t. e. r. p. p. o. n. e. t. i. n. p. r. i. m. o. q. u. o. d. e. s. t. a. n. t. i. n. o. p. o. l. i. t. i. n. e. r. u. a. d. h. i. s. d. n. i. m. o. r. d. i. n. a. t. i. s. p. p. i. a. s. p. o.
s. u. l. t. e. r. p. p. o. n. e. t. i. n. p. r. i. m. o. q. u. o. d. e. s. t. a. n. t. i. n. o. p. o. l. i. t. i. n. e. r. u. a. d. h. i. s. d. n. i. m. o. r. d. i. n. a. t. i. s. p. p. i. a. s. p. o.
s. u. l. t. e. r. p. p. o. n. e. t. i. n. p. r. i. m. o. q. u. o. d. e. s. t. a. n. t. i. n. o. p. o. l. i. t. i. n. e. r. u. a. d. h. i. s. d. n. i. m. o. r. d. i. n. a. t. i. s. p. p. i. a. s. p. o.

[illegible]

Omnino uero dicti fratres in terris hereticarum et animarum suarum perierunt. In diebus istis conueniunt et aliam viam terrarum orientis discesserunt et guerra maxima orta fuit quia de ea uer reuoluit. Solomonia ipse erat. Hic ergo cum eos mer-
cimonio discesserunt usque orientem amittente sperantes ad egressu tamlibet reuer-
tere posse. Et de buccara egressi recedentes querebant ad ciuitate ouchacem. q est in fine regni in
orientem. et inde recedentes transierunt flumen tigris. de inde transierunt et de fin
aldis longi. 17. Dietro uero nlla adeest ciuitas neq caput q solu tatarum imperio
de eos hostilio uagabund manet. Quo uenerunt ad buccara i primario in

Hic aut p[re]sentis de[st]i[n]at[i]o[n]is p[ro]p[ri]et[ate] ad mag[ist]r[u]m et nobiles ciuitates buccara et ipsa est
m[ag]is ciuitas talis p[ro]p[ri]et[ate] p[ro]p[ri]et[ate] in qua p[ro]p[ri]et[ate] ciuitas manet buccara et
aut ex tunc l[ib]er dicitur et q[uod] tunc n[on] ante i[n] n[on] reade[n]t p[ro]p[ri]et[ate] ipsa ciuitas
rebus d[omi]ni g[ra]t[ia] p[ro]p[ri]et[ate] p[ro]p[ri]et[ate]. S[ed] legat[us] reade[n]t alau p[ro]p[ri]et[ate] co[n]t[ra] d[omi]n[u]m
ad mag[ist]r[u]m l[ib]er d[omi]n[u]m d[omi]n[u]m aut t[er]rit[ori]o d[omi]n[u]m
S[ed] legat[us] d[omi]n[u]m ad
S[ed] legat[us] d[omi]n[u]m ad
S[ed] legat[us] d[omi]n[u]m ad

Florum quingentis inde passim nobiles quedam uirgines natus et legatum alau
regis et dñi tartarorum orientis; que mittit ad acublay mag^u banem
dñi omis tartarorum. Qui dñs uidisset hos fratres. q^{uod} iⁿ tribus die
bus latinis fuisse nouerunt miratio est valde. Et cū ipos nouit miratio tollit
aliquid est. Et in ardore placet honoris utilitatisq^{ue} uobis magis quodlibet
cū respondisset. se prius q^{uam} posse totius obedire. Dixit badi ad magis bane
dñs omis tartarorum. et ipse nūq^{uam} latinis uidet. et cū ipse magis uidet deprecasset
se meū uobis placet. sū arduisq^{ue} ab ipso utilitate magis habetis et honore.
petitisq^{ue} meū badiis absq^{ue} iⁿ pedimentis. Hoc placuit q^{uod} ipm secuti sūt. et
cū p^{er} annos unū uicerunt p^{er} se p^{er}sonas. et p^{er} p^{er}sonas. tūq^{ue} ad magis bani
curias p^{er}ueniunt.

Quid questum magnus hanc omni ad
 Quia cum hanc hanc ipso daretur et ad delectatione male recipisset de facto
 et meritis latius populosque intereratque aper. De impatore inde or
 alio regibus principibusque qui eos merces quo gentes redit vno belli
 quo suo ordine ordinat. De papa filio et de alio filio et de omni genere
 et de Tuerpignat ualde solite. ipi uo ptem eos gntia satisfecerunt p posse.
 Quid magnus hanc eos misit ambasciatore ad sumus pntiss

Negli che desiderano deintendere lemerauioxe chole delanada delagra
 de armema. persia et Tartaria. de lemdie et diuette parte de
 modo. legano questo libro et intreranno. quello che nobelle cittadino
 veneciano mis marchio Dello. auendo crechato tutte le dte prouie
 uolle tutte merauioxe i quelle trouate. adilleto dilatoe i qsto libro
 seruire. Et aco che questo libro sia uerituelle. Nun diermo
 lechole uocudo p uocudo. elc alidde p le alidde. et aco che
 no seprende erore. echele chole federrano noha reputate fabulle. eda itendere che mis
 marchio Dello fo i tutte sop dte prouie. noma. fin questo di futuato homo latino
 che tante chiduciste parte del modo felle chome lui in tanta abilita auelle deuedere
 et itendere. et anho p iprogredi delauita soa pora itendere euudicare quel nobel
 cittadino offer stato de otimo ebon i regno. po chesempre datuti signori eperapi do
 ue el chapito el fu aprelato. p dar principio nei piu logo parlare no mi offende Nequ
 re uenire. anataci dachola chome p el dco mis marchio Nde puxo de gnuou
 fu notate elcite. Ne ianij del nostro signor mis ihu xpo ad. h. lxxviii

El tempo che baldurino era i peradore de chostantinopoli. Nel ad. h. l. de nobel
 cittadino veneciano goe mis mahio emiser nicholo solo fratello. chapitono nel dco
 luogo de chostantinopoli coloro marchadante et erano homeni sapientissimi
 elchaltidi. deliberano de andare coloro marchadante i mar mare. p uadagnare et co
 quelle motono sopra una naue. et chapitono i Saldadia. equini dmozadi. p alcun
 tempo. deliberano palaz piu oltra. et auuax. nolarmura. melle achamio et dapo
 molte cor nate. chapitono a Saturn. Nel qual luogo era abrachachan signor diua par
 te. delatuturua. el qual signor auendo i tpo delauenuta deiditi do latini uolle ue
 der quelli. et alidti quelli uedendo homeni debon prezio. ifoxe grande onor. uide
 doi sempre alliegra monte euolentieri. Subito quel mis mahio emiser nicholo udi
 alchun goielli che coloro auenano portati p bona uoluta. aquel signor aprextorio
 el qual presente abrachachan signor uolentieri tereuete. elqualechome cenai signor
 lauoluta de do atanto aqua mis mahio emiser nicholo feceno aprextori. Etando
 iditi de fratelli nel dco luogo. lochorse guera fra abrachachan diti et Alau signor
 detartaria deuer leuante p modo che essendo lestrade rotte. Ne essendo modo auditi di
 fratelli tornare seguri essendo frati i diti luogo ano uno / del aqual albrullima gura
 fo uinatore Alau. deliberano iditi fratelli no posendo tornare Passar piu auant. Par
 tite de abrachacha. et cõsono ad Ataccha atade allahij del regno. et delli separa
 no et anstino alhime de Tigus. che uno di humi naturalli chechito defender dal
 paradiso deledilae. et dapo i chamino p un diserto el qual elongo xon yornade no
 trouono atade ne chafello alchuno. malilla mente taitari aho tende iqual ui
 ueno debohame. Auendo loro Passato el deserto de bachara. trouano una nobelle et
 gran atade chiamata bachararh. et e lamagor atade de persia. cõto iditi de fratelli
 uita atade nopossendo andar piu oltra p esser rotte lestrade nopossendo tornare dmo
 zono quini tre ani. Nel qual tempo chapito ambaladori del signor Alau. laqual el
 mandaua algra signor detartari che nomea Cahlay chan. elapudo el dco ambalador
 cheli era iditi de latini p gra merauia uolle ueder quelli. po che p auanti mai piu
 no auoua uisto homeni daponente. et aquelli iditi ambaladori diti. signora latini fo
 piu uoli uegnre co Nui dalgra signor detartari. el qual nui no uete alchun homo dele
 parte nostre essendo uui nobelli homeni et sau chome uui fete. Jo ue afermo el dco
 gnoe ue uedera uolentieri chane grade honore et uelle. et auera gemidissima
 prayer et chontento i tender dauui de lenoue et codiciu delle catade nostre po
 chele signor de gradissima possanza et mollo deluicoso de alen chole noue.

